

第五二号



2005

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人

文

第五号

二〇〇五年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

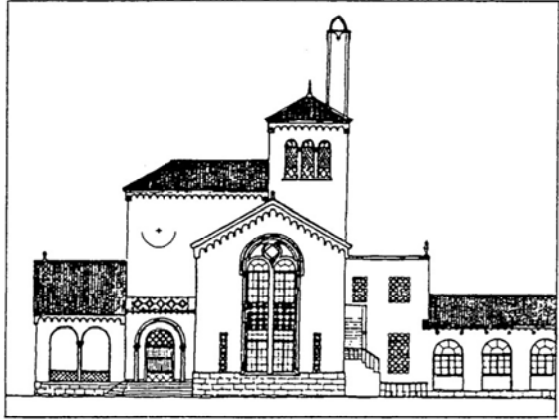
共同印刷工業

非売品

人文 第五二号

2004年4月—2005年3月

も く じ



随想	1	
創立七十五周年記念シンポジウム開催にあたって	1	
..... 森 時彦		
誌謝人文—人文への感謝 范金民 岩井茂樹 前田直美 訳	
抹茶の香り モニカ・エスポジト	
講演	14	
夏期公開講座	14	
記憶を造形する命日—ベンジャミン・デイズレイリとプリムローズ（小関）／中国の祭日と死者を巡る物語り（佐野）／フェンスの中の記念と祈念—米陸軍生誕舞踏会—（田中）／「思い出せない苦惱—中国共産党の記念日」（石川）	14	
創立七十五周年記念 中国宗教文献研究国際シンポジウム（麥谷）	21
退官記念講演 漢字の誕生（小南）／古代シュメールの土地制度—一枚の粘土板からなにが読みとれるか—（前川）	26
彙報	30	
人文研の「たからもの」 雲岡石窟の出土品	42
共同研究の話題 作られるべきものとしての共同性	44
生活空間の伝統的要素を腑分けするために 共同研究を変えよう	44
宝 湯 所のうち・そと	50
不惑の惑惑 「親日派」と「蛙の目玉」	50
大好きな日本の私 ノスタルジア吉田	50
最後の野帳 書いたもの一覽	58
..... 高井たかね		
..... 田辺 明生		
..... 李 昇 燁		
..... 山崎 岳		
..... 倉島 哲		
..... 森本 淳生		
..... 田中 淡		
..... 竹沢 泰子		
..... 浅原 達郎		
..... 岡村 秀典		

創立七十五周年記念シンポジウム 開催にあたって

森 時彦

わたくしども京都大学人文科学研究所は、今年二〇〇四年に創立七十五周年を迎えました。数え方はすこし複雑です。現在の京都大学附置研究所としての人文科学研究所は、一九四九年に三つの研究所が統合して設立されました。三つの研究所とは、一九三九年に京都帝国大学の附置研究所として設置された人文科学研究所（わたくしどもは旧人文と呼んでいます）、一九三四年にドイツ文化研究所として設立され、一九四五年に改組されて成立した西洋文化研究所、そして一九二九年に設立された東方文化学院京都研究所が一九三八年に改組して成立した東方文化研究所です。このうち最も早い一九二九年から数えて七十五年ということになります。

外務省から助成金をうけ、中国文化を中心とした学術研究を目的として設立された東方文化学院京都研究所は、一九二九年の四月に発足しましたが、正式の開所式は一九三〇年十一月、



北白川の高台にスパニッシュ・ロマネスク様式の瀟洒な新所屋が完成した時にあわせて挙行されました。このため、開所を記念する行事は毎年十一月に行われるのが慣わしになっています。平年ですと、十一月の第一木曜日に開所記念講演会を開き、当研究所の研究者が三人、各人の得意分野における研究成果を披露しておりますが、今年はとくに節目の年にあたりますので、国内外から第一線で活躍しておられる研究者を多数お招きして、十一月十八日―二十一日の四日間にわたり、フランス国立極東学院・イタリア国立東方学研究所との共催で、「中国宗教文献研究国際シンポジウム」を開催することにしました。ご多忙の中、シンポジウムへの参加を快諾いただいた発表者の皆様には心より御礼申し上げます。

仏教や道教など中国宗教の研究は、東方文化学院京都研究所の発足以来、一貫して研究所のもっとも重要な研究分野の一つとして、重厚な成果を蓄積するとともに、東方文化研究所の初代所長をつとめた松本文三郎をはじめ数多の碩学を輩出してきました。そして現在も、世界に誇るべきスタッフが揃っている分野の一つであることはご存知のとおりですが、最近当研究所との連携関係が緊密化しているフランス国立極東学院・イタリア国立東方学研究所も、やはり中国宗教研究に着実な成果を挙げておられます。

このような次第で、中国宗教文献研究という今回のシンポジウムのテーマは、七十五年におよぶ研究所の長い歴史に思いを

馳せながら、同時に国際的な連携研究の新しい方向を探る第一歩として、まことに相応しい設定ではないかと、ひそかに自負しております。

またこのシンポジウムは、高田時雄教授を拠点リーダーとする二十一世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」の研究プロジェクトの一環として企画されたものでもあります。中国学の伝統に安住することなく、新しい中国学の可能性を探るという二十一世紀COEプログラムの趣旨にも、よく合致したテーマ設定になっております。さらに今年には国立大学法人スタートの年にも当たります。わたくしども人文科学研究所も決意を新たに、人文学分野における研究・教育の発展にいつそう貢献する所存です。その意味からもこのシンポジウムが、百周年へ向けた新たな四半世紀のはじまりに際して研究所の新しい伝統を築いていく第一歩となるよう期待してやみません。

最後に皆様のご支援と忌憚のないご批判をお願いして、京都大学人文科学研究所創立七十五周年記念国際シンポジウム開催のごあいさついたします。



北白川の高台にスパニッシュ・ロマネスク様式の瀟洒な新所屋が完成した時にあわせて挙行されました。このため、開所を記念する行事は毎年十一月に行われるのが慣わしになっています。平年ですと、十一月の第一木曜日に開所記念講演会を開き、当研究所の研究者が三人、各人の得意分野における研究成果を披露しておりますが、今年はとくに節目の年にあたりますので、国内外から第一線で活躍しておられる研究者を多数お招きして、十一月十八日―二十一日の四日間にもわたり、フランス国立極東学院・イタリア国立東方学研究所との共催で、「中国宗教文献研究国際シンポジウム」を開催することにしました。ご多忙の中、シンポジウムへの参加を快諾いただいた発表者の皆様には心より御礼申し上げます。

仏教や道教など中国宗教の研究は、東方文化学院京都研究所の発足以来、一貫して研究所のもっとも重要な研究分野の一つとして、重厚な成果を蓄積するとともに、東方文化研究所の初代所長をつとめた松本文三郎をはじめ数多の碩学を輩出してきました。そして現在も、世界に誇るべきスタッフが揃っている分野の一つであることはご存知のとおりですが、最近当研究所との連携関係が緊密化しているフランス国立極東学院・イタリア国立東方学研究所も、やはり中国宗教研究に着実な成果を挙げておられます。

このような次第で、中国宗教文献研究という今回のシンポジウムのテーマは、七十五年におよぶ研究所の長い歴史に思いを

馳せながら、同時に国際的な連携研究の新しい方向を探る第一歩として、まことに相応しい設定ではないかと、ひそかに自負しております。

またこのシンポジウムは、高田時雄教授を拠点リーダーとする二十一世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」の研究プロジェクトの一環として企画されたものでもあります。中国学の伝統に安住することなく、新しい中国学の可能性を探るという二十一世紀COEプログラムの趣旨にも、よく合致したテーマ設定になっております。さらに今年も国立大学法人スタートの年にも当たります。わたくしども人文科学研究所も決意を新たに、人文学分野における研究・教育の発展にいつそう貢献する所存です。その意味からもこのシンポジウムが、百周年へ向けた新たな四半世紀のはじまりに際して研究所の新しい伝統を築いていく第一歩となるよう期待してやみません。

最後に皆様のご支援と忌憚のないご批判をお願いして、京都大学人文科学研究所創立七十五周年記念国際シンポジウム開催のごあいさついたします。



誌謝人文—人文への感謝

范 金 民

(岩井茂樹訳)

一九九八年、わたくしは初めて東瀛の古都、京都を訪れ、京都大学人文科学研究所の岩井茂樹教授につれられて、分館図書室を見学しました。縹緋は屋に盈ち、鉛槧は架に挿び、天禄の珍本が放つ墨香に誘われました。いつの日か、これら天壤の珍藏をおもふ存分に繙いてみたいものだ、そうすれば明清史を学ぶ者の端くれになれようかと思われたものです。有り難いことに人文研より得がたい機会を提供され、この寺社名刹のならば景勝の地で二〇〇四年八月から二〇〇五年二月までの半年間、客員として愉快な時を過ごすことができました。

日の出を迎えるたびに、二株の楠の太木をながめて力が湧いてくるのを覚え、すがすがしい気分で研究所の本館に向かいます。落ち着いた研究室で、邪魔もはいらず、俗事に煩わされることもなく、また部外者に騒がされることもなく、心を定めて本を読み、思考することができます。読書に疲れ、首をあげて遠望すると、正面には北山のうねりが、右手には比叡の秀峰が、

左手には嵐山の明美があつて、満眼の蒼翠に精神を洗われ、爽快な気分になります。「身は他郷にあるも客たるを知らず」とはこのことでしょう。

半年のあいだ、外面は樸実で便利この上ない本館と、造形美しく蔵書の豊かな分館のあいだを往復し、昔から読みたいと思つていた書物、黄希憲の『撫吳檄略』、祁彪佳の『按吳檄稿』、張国維の『撫吳疏草』など明人の文集や、『南京都察院志』など稀見の本をゆつくりと消化し、また『オランダ商館日記』、明治政府商工局の中国視察報告書など一度は読みたいと思つていた資料を読むこともできました。さらに、二度も東京に出かけて、国会図書館と東京大学東洋文化研究所が所蔵する清代江南についての文書資料も寓目の機会をえて宿願をはたし、明清時代の江南と長崎貿易についての日本の研究者の論文や著書を存分に拝読することが叶いました。滞在中、研究所の創立七十五周年で、学問的な雰囲気のみならず、人文学への思いが勃勃と湧いてくるような展示に触れることもできました。

人文研の学者は、真剣に本を読み、よく本を読み、長期に亘つて一つの本を読むことで世に知られていますが、この度は、岩井茂樹教授が主宰する「元代の法制」研究班で「元典章」を精読しました。わたくしの所属する南京大学歴史系は、元史の研究で学界に名高く、わたくしも元史の専門家である陳徳芝教授の教えを受けました。しかし、恥ずかしながら、これまで「元典章」を読みこんだことはありませんでした。日本の学者



が『元典章』の解釈に鋭く集中してとり組むさまに、汗顔の至りでした。ネットワークは、インターネットだけを指すのではなく、通商貿易や商人の活動もすべてネットワークを形成しています。籠谷直人教授の主宰する「帝国とネットワーク」研究班は、ひろい視野のもと欧米や東南アジアからも俊秀を招いて総括的なシンポジウムを開催し、すべて英語で通すということ、名実ともにネットワーク班でした。

半年の時間はあっというま、この半年は、わたくしにとつてたいへんに意味のある、愉快な半年でしたし、これからも思い起こして懐かしむ半年となるでしょう。短い半年間でしたが、人文研にかけた面倒のわずかすは挙げることもできません。事務室の渉外、会計、文書送達の担当の方々は度々にもかかわらず、こころよく親切に応じていただきましたし、とくに図書室の皆さん、なかでも鈴木さんにいつも重い書物を研究室まで届けていただいたことなど、忘れることができません。人文研の学者の学問人品、謹厳な学風、他人に対する誠意と思いやりは、わたくしの心のなかに永く留まるでしょう。「人文を観て、もつて天下を化成す」という志と努力は、愚昧を感化し、後世に裨益するに違いありません。わたくしにとつて人文研が棲みかのようになり、毎日研究室にきていたものですから、人文研の一木一草に思いが染み付いてしまいました。ここでの愉快な時間を懐かしみ、京都大学人文科学研究所がわたくしに注いでくれた厚情を大切にすることでしょう。研究所の皆様すべてに心

から感謝するとともに、皆様が健康を保たれ、それぞれの願いが叶えられるようお祈りいたします。研究所がいよいよ繁栄し、隆盛にむかわれますように。

（范金民氏は南京大学歴史系教授。二〇〇四年八月十五日から本年二月十四日まで文化研究創成研究部門外国人研究員として滞在 岩井記）



抹茶の香り

モニカ・エスポジト
(前田直美訳)

まるで魔法にかかったようだ。よく暗れた初春のバリ。柳田聖山教授、樺島勝徳師、ウルス・アッブ、そして私。新たな命のおとずれを、ゆつくりと楽しみながら、私たちは黙ってチュイルリー公園を歩いている。私は振り返って、柳田先生の顔を見る。覚めやらぬ感動で目が輝いている。つい今しがた、先生は生涯をかけて研究してこられた敦煌写本と対座しておられたのだ。ペリオ三五五九である。まるで音楽家のように、長い指で黄ばんだ紙にそっと触れ、不思議な力がひっそりと息づく木目をたどり、諳んじている箇所で止まる。先生は驚嘆し、この顔の皺や不完全な部分をも発見する。八十歳になってはじめて間近に写本の相貌を眺めることができたのである。まさにその瞬間、先生の過夫がすべてその顔にあった。

禅学研究に没頭していた若き柳田先生が、ドゥミエヴィル教授と知り合ったのは、五十年前のことである。日本の大学が、漸く落ち着きを取り戻していた一九五〇年のある日、柳田先生



のもとに一本の電話が入った。日仏学館からであった。花園大学が発行している学術誌『禅学研究』のバックナンバーをすべて購入したいというのである。その時、柳田先生は、はるかなる国フランスの一人の教授が、この雑誌に関心をもっていたことなど知る由もなかった。結局、コレージュ・ド・フランスから直接注文が届いた。コレージュ・ド・フランスの碩学、ポール・ドゥミエヴィル教授の興味を引いたのが、まさしく、『禅学研究』四十四号に書いた自らの論文であったことを知って、柳田先生は非常に驚いた。「祖堂集の資料価値」という論文であった。『祖堂集』は、中国禅宗の歴史を語る最古のテキストで、韓国の海印寺でその版木が見つかったのは、二十世紀の初頭である。柳田先生は、このテキストに興味を持った最初の研究者の一人であった。日本の若き研究者と、傑出したコレージュ・ド・フランスの教授との長きにわたる友情を取り持つことになったのが、このテキストであった。ドゥミエヴィル教授は以前から、『祖堂集』の写しと、当時はまだほとんど知られていなかった、無著道忠(一六五三—一七四五)の臨済録の注釈『臨済録疏論』の複写を是非手に入れたいと考えていた。この注釈書は臨済録の研究に欠かすことのできない貴重資料であった。『祖堂集』も『臨済録疏論』も全巻のコピーは、京都でも入手困難であった。簡便なマイクロフィルムや、ゼロックスの機械は、まだ一般に普及していない。若い柳田先生が五年以上の歳月をかけて、自らが印刷りで複製した二つの大冊を、ドゥ



ミエヴィル教授は熱望した。そして、若い日本の研究者の方も、フランスとのこんな繋がりがや『臨済録疏論』研究のおかげで、パリの国立図書館にある敦煌文献のコピーを入手するのがそれほど困難ではなくなった。今度は、ドゥミエヴィル教授が直接柳田先生に鮮明な敦煌文献の写真を送った。そこには当然、先生が最も手に入れたかったペリオ三五九も含まれていた。「よくもまあ、続いたものだ。私は今後もお生存を許されるなら、このテキストを読み続けたいと思う」。

講演の途中で、柳田先生は、一息ついてそう言った。ドゥミエヴィル教授と柳田先生が初めて会ったのは、一九六六年になってからであった。

「当時、学問の入口でなお彷徨し続ける私に、先生との御縁がいかに希有の御縁であったか、今思い起こすだけでも、身震いするほど、襟を正すほどの感激です。……ただそれだけのことですが、当時の私に、それがいかに感動的であったか、先生がお亡くなりになる一九七九年まで、否、今もなお続いているのですが、先生はいつも私の前にいる、コレージュ・ド・フランスという大学か、研究所か、その組織のことはよく知らんのですが、私にとっては、とにかく古風な研究、一世紀も前のヨーロッパ第一の東洋学の大本山のことでした。そんな御縁で今日は、皆様にお目にかかることができました。五十年のあいだ、一度、生きているうちに、コレージュ・ド・フランスを訪ねたこと、強く思うようになって、終に今日になったのです」。

コレージュ・ド・フランスで、柳田先生はドゥミエヴィル教授との長い友情をこんなふうに語った。聴衆のなかには、ドゥミエヴィル教授のお嬢さんやジャック・ジェルネ教授、レオン・ヴァンデルメルシユ教授、ジャン・ピエール・ディエニエ二教授、ジャン・ノエル・ロペール教授などの姿も見られた。

私たちは車でホテルに帰り、少し休息を取った。樺島さんが声をかけてくれた。二つの部屋を隔てる廊下に出ると、すでに抹茶の甘い香りが漂っていた。部屋の窓に浮かぶ白い作務衣姿の先生のシルエットが消えると、無駄のない力強い先生のお点前の動きがあった。茶筌の音が、ホテルの向かいを絶え間なく通過する列車の静かなリズムに反響する。一段高いところを走るメトロと乗客の顔が、不思議な沈黙の中で、窓越しに姿を変えては現われる。「よく通るな。みんなが遊んでいるか……」と先生が感嘆したように呟く。子供のようなすがすがしさ、子供のまなざしを通して、世界が素顔を表わす。

私は、サンジェルマンの靴屋で買ったばかりの白い靴を履いた先生が、タップダンサーのように鏡に向かった姿を思い浮かべる。今にも飛び立ってエッフェル塔を越えてゆきそうだ。私もあとを追う、そしてびたりと日本文化会館に降り立つ。入口には、柳田教授の「禅と現代」の講演が大きく報じられている。この会館の館長で元NHKパリ支局長の磯村尚徳氏が、三百人を超える聴衆に、演壇の三人を紹介する。高名な柳田聖山教授、ウルス・アッブ博士、樺島勝徳和尚です。韓国のずっしりとし



た数珠を首にかけた、瘦身の先生が立ち上がり、前をじっと見つめて、語り始める。

「日本から参じました、柳田聖山です。禅の勉強を始めて八十年、まだ続いています。ヨーロッパは初めてですが、これがおそらく最後だろうと思います。通訳にウルス・アップさん、スイスから二十年前に日本に来て、禅の勉強をしています。古い友人です。今日は貴国を代表されるパリの皆様、とくにはるかなる極東日本の歴史と文化と現代の問題に、格別の関心をもっておられる皆様に、禅の話を申し上げます。光栄に存じます。さて、禅は悟りの宗教です。はじめに、一つの譬え話をいたします。皆さま、御自分の顔を御存じでしょうか。そんなこと、簡単だとおっしゃるにちがいないのですが、鏡にうつった顔は、実は自分の顔じゃないのです。自分の顔に似たような顔ですが、本当の顔じゃない。今、地球上に六十億の人類がいますが、誰も自分の顔を見た人はいない、六十億から一人を引いた、六十億マイナスワンが、私の顔を真剣に見守っているのに、私は自分の顔を見ないで、平気で暮しているのです。ここが禅の出发点です」。

自分の顔でない顔？ 実際、鏡にうつる顔は左右が逆になっている。さらに、その顔は普段とは違う取り澄ました顔である。よく見られようと、ポーズを取った、構えた顔である、あるいは、怒り、悲しむ顔である。

「……二人の修行僧が、川を渡る話があります。水上に映る

自分の姿をみて、片方の僧が、悟ります。この人はだれだろう、長く探した彼に、私は漸くめぐりあったが、しかし、私は決して彼じゃない。こう気付いて始めて、彼に似た彼に、私はめぐりあうことができた」。

私は我に返る。チュイルリー公園にいるこの並外れた人物の顔はどこにあるのか？ 私の顔はどこか？ その顔はどうなるのか？ 数日後には、私の新しい仕事が始まるだろう。かつて柳田先生が所長を務められた研究所に、私も籍をおくことになっているのだ。この研究所はどんな顔か？ 所員たちの顔は？ そこには、まさに今私が目にしたばかりの、ポーズを取らない真の顔はあるのだろうか？

あれから二年経った。人文分館の廊下を歩きながら、柳田先生のおられた時代はどんなふうだったのだろうかとよく考える。先生の曾ての研究室のそばを通ると、楽しそうな先生の声が聞こえてきそうだ。「お国の驢馬はどう鳴きますか？」。世界中からやってきた偉大な教授連が、柳田所長を前にして、失礼があつてはならぬと、大真面目に、また大いに気後れしながら、「ヒーオ、ヒーオ」「イーア、イーア」「グーヒー、グーヒー」と、金切り声を上げるのだ。そんな顔を思い浮かべて私は笑ってしまう。すると、突然、廊下に香りが漂う。甘い抹茶の香りだ。重苦しくて単調な廊下の雰囲気が一瞬のうちに、魔法のように変わってゆく。





夏季講座

記憶を造形する命日——ベンジャミン・デイズレイリとプリムローズ

小関 隆

イギリス保守党の著名な政治家ベンジャミン・デイズレイリの命日を探りあげ、この命日が毎年恒例の記念日になっていくプロセスを明らかにすること（命日が毎年恒例なのは当然だが、デイズレイリの命日は広

くパブリックな関心を集める記念日になっていく）、そして、記念日となった命日の語りによって、デイズレイリの記憶がどのように造形されていったのかを検討すること、夏期講座において課題としたのはこの二つである。

デイズレイリの命日である四月一九日はプリムローズ・デイと呼ばれ、毎年この日にデイズレイリ像をプリムローズで飾りつける慣習はごく最近までつづいていた。この奇妙な慣習の根拠とされたのが、「死の床にあつたデイズレイリの見舞いにヴィクトリア女王が彼の好きなプリムローズを贈り、葬儀の際にも女王手書きのカードを添えたプリムローズの花輪が棺に載せられた」という「伝説」であつた。一八八三年のデイズレイリ像除幕式を重大な契機として、命日にプリムローズを着用する慣習を広めようとする動きが本格化し、プリムローズを媒介とする女王とデイズレイリの親愛な関係のイメージにインスパイアされた多くの人々が、こうした動きに積極的に対応していった。一八八〇年代から第一次大戦前までの時期、毎年命日は、自らプリムローズを身につけつつ、デイズレイリ像の飾りつけを見物する人々で、お祭り騒ぎのような雰囲気包まれることになる。見物人の多くは熱心なデイズレイリの信奉者というわけではなかつたが、そ

れでも、毎年ごく軽い気持ちで保守党の元党首の銅像を眺めることを通じて、彼らの間に着々と保守主義的な気分が浸透していったことは否定できない。つまり、年中行事化したプリムローズ・デイは、多くの人々をいわば「無自覚な保守主義者」として動員する機会となつていたのである。

プリムローズ・デイの定着という事実は、少なくとも年に一回、反復的にデイズレイリを偲び、語る機会が訪れることを意味する。命日に故人を語ること自体はなんら珍しくないが、賑やかな雰囲気の中、小さくないオーデイエンスに向け、死後延々と語られたという意味において、デイズレイリの記憶は特異という条件の下で造形された。そして、プリムローズ・デイにおける反復的な語りは、「国民全体に奉仕したことで、党派や階級、地域をこえて尊敬と愛惜を集め、中でも女王から特別に高く評価され、私的にも愛された国民的英雄」、「その精神が今日の状況においても有効性を発揮する稀有の先見性をもった政治家」、といった形象へとデイズレイリを仕立て上げていった。その際、決定的な強みとなつたのが、女王とデイズレイリの強い結びつきを印象づける「伝説」の存在であつた。

一九六一年に「伝説」の信憑性が公式に否定された

にもかかわらず、デイズレイリ像の飾りつけはその後も三〇年以上つづいた。同じく一九世紀を代表するピール、ウエリントン、パーマストン、グラッドストーン、といった政治家も各々に追悼はされただろうが、プリムローズほど魅力的なシンボルに結びつけられることはなく、デイズレイリほど継続的に想起されしなかつた。デイズレイリの記憶は、プリムローズにシンボライズされることで、いわば別格のインスピレーションを後の時代に提供することができた。懐かしい花、花にまつわる「伝説」、花にまつわる記念日がつ力である。

中国の祭日と死者を巡る物語り

佐野 誠子

伝統的な中国の祭日は、同じ数字の並ぶ日が多い。そして、そのような祭日に行われる儀礼の由来として、死者にまつわる物語りが多く存在する。どうしてこのような現象が見られるのだろうか。

端午の節句である五月五日は戦国時代末期の詩人屈原の命日として、その死を悼むために、五色の糸で巻いた粽を江に投げ入れる。また、ドラゴンボートも屈原の死を悼むために行われているという説がある。ところが、史料では、屈原が旧暦の夏ごろに没したことまでは分かるものの、命日を五月五日とする根拠は見つからない。もともと旧暦五月五日は夏の暑い盛りであり、香草を用いた暑氣払いが行われていた。中国南方に古くからあった香草のイメージのつとり、香草の比喩を多用した作品を作った屈原と、暑氣払いの香草とが結びついて、屈原の命日が五月五日とされたのだ。

三月三日には、曲水の宴という杯を人工的に作った流れに浮べ、杯が流れる間に詩歌を作るという行事が行われた。この曲水の宴は中国の南朝時代貴族・文人の行楽として流行した。この行事の由来にも、漢代に三人の娘が三月三日に揃って死んだことを忌み嫌って祓禊を行ったという話がある。しかし、この話は南朝においては、好まれず廃れかけていた。そもそも、この三人の娘に関する話の記録が見られるのは中国北方地域に限られる。三月三日の祓禊の行事が北方から南方へと伝わる時に、三人の娘の話が忘却され、文人達の娯楽へと変質してしまったのである。

一月十五日には、紫姑神を降ろす行事が後世まで行われた。紫姑神は、正妻にいじめられた挙げ句、廁で自殺を図った女性が神となったものである。一月十五日は旧暦では春に該当し、養蚕を始めるにあたり、祈禱を行う時期であった。養蚕は女性がやる仕事であるために、女性である紫姑が一月十五日に結びつけられたものと考えられる。

このように、死者達は実際に祭りの日に死んだ訳ではない。そもそも中国古代において数字、とりわけ陰陽説に従えば、陽に属する奇数が並んだ日は、陽の力を持つために不安定な日とされ、この世とあの世の境界が曖昧になると考えられていた。そして、あの世に

行ってしまうのではないかという不安を払拭するため、またあの世からくる死臭を落とすために、祓禊の行事が行われたのだ。祓禊という行事本来の性質は、死にまつわる物語りを吸引することで、行事の合理的説明を試みようとする。また逆に死者は祭りとは結びつくことによって神格化され、一年に一度自らの存在を主張することができた。また、これらの由来の物語りの文字資料は南朝梁代のものが多い。それまでは口頭で伝えられてきたために変化しやすかった伝承が文字化されることで固定されたともいえよう。

フェンスの中の記念と祈念

——米陸軍生誕舞踏会——

田中 雅一

本報告で扱うアメリカ合衆国陸軍創設記念舞踏会は、過去の戦争で捕虜となったり行方不明の兵士を祈念すると同時に、陸軍そのものの創設とその戦争の歴史を記念する式典である。この式典は正式に「The U.S. Army Birthday Ball すなわち「米陸軍の誕生日を祝う舞踏会」といい、毎年六月に本国はいうまでもなく世界各地に駐留している米陸軍基地において行われる。期日は基地によって異なる。

この式典はおおきく三つに分かれる。すなわち、捕虜や行方不明になった軍人たちへの追悼、陸軍の歴史を示すパフォーマンス、最後に舞踏会である。

会場の舞台には陸軍のバンド（吹奏楽団）が座っている。その近くに、バスデイ・ケイキが置かれている。そして、やや離れたところに追悼の対象となるテーブルが設置され、追悼用のテーブルをはさんで、会場には左右に円テーブルが十二ずつ並び、コース料

理が運ばれる。ひとつのテーブルに一〇名が座っている。円テーブルの周りには白い布で覆われたテーブルが八つある。これは行方不明者たちのテーブルだと説明された。ひとりの兵士が追悼テキストを読みながら、本国の地を踏まなかつた死者たちを追悼していく。

国旗と軍旗が真ん中の追悼テーブルに進む。そして、このテーブルとそこに置かれている品々の象徴的意味が、つぎつぎに説明されていく。たとえば、このテーブルが小さいのは、圧制者たちと一人対峙してきた捕虜たちの「弱さ」frailtyを示している。テーブルクロスが白いのは、招集されたら国家のために戦おうというかれらの目的の「純粹さ」purityを示している、などである。

このあと、当時の軍服を着た兵士たちが一人一人現れ、軍旗に各戦場を表す吹き流し campaign streamer をかけていく (streamer ceremony)。これは当時の作戦に参加した兵士が行ったことの再演である。独立戦争から順に戦争が語られていく。

つぎに、舞台の中から最年少と最長老の兵隊が選ばれて、ケーキカットがなされる。そして、四つの旗が退場する。

以上で公式な式典は終了する。このときまでにフルコースの食事も終了している。最後に、舞台の前の広

場で舞踏が始まる。

陸軍をめぐる祈念と記念の儀式において、行方不明となつた兵士たちは国家に包摂され、国家のもとで、国家とともに復活する。



「思い出せない苦悩

——中国共産党の記念日」

石川 禎 浩

中国共産党にとって最も大事な記念日は党の創立記念日である。ただ、現行の七月一日(七一)の創立記念日は、党の第一回大会に参加した毛沢東らが、一九二一年七月に上海で開かれたその大会の日付をハッキリと思ひ出せず、また信頼できる資料もなかったため、一九三八年に便宜的に一日に制定されたものだった。そのさい、その七月一日が抗日戦争勃発(盧溝橋事件)一周年の七月七日とセットにされ、「記念週」の一環として祝われたことは興味深い点である。

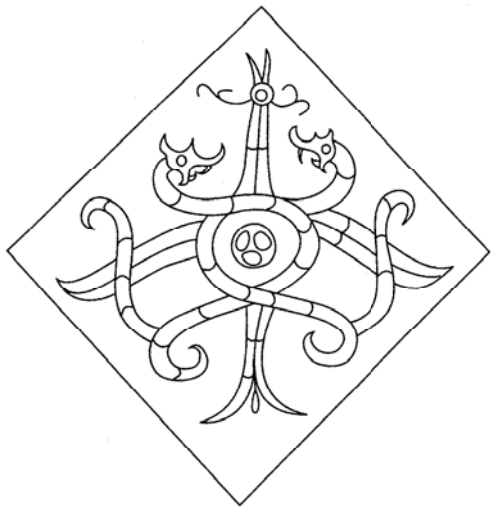
当初、その「七一」は、第一回大会の厳密な開催日としてではなく、あくまでも党創立の「記念日」として設定されたものだったが、それが第一回大会の開催日と混同されるのは避けられないことだった。さらに、中華人民共和国成立直後に相次いで刊行された権威ある著作が、「七一」を第一回大会の開催日であると記述したことによって、「七一」は「記念日」であると

同時に、「史実」の扱いを受けるようになっていった。これに伴い、本来なら定説に先だつはずの歴史資料や関係者の記憶が、その定説に符合するように改変されてしまうという逆転現象すら生じていたことが確認できる。つまり、「七一」は日付として根拠が怪しかつたにもかかわらず、その日が党の定めた記念日であるからには、何としてもそれを創立の日付にせねばならないという本末転倒の努力がなされたのである。

かくて、「七一」が人民共和国で定着し、盛んに慶賀されればされるほど、一九四九年以降、中国に残つた第一回大会参加者の悩みは深まった。かれらは、「七一」が史実の日付ではないことに薄々気づきながらも、その日付を正確には思い出せないままに、栄えある第一回大会の模様を語ることを余儀なくされたからである。第一回大会に参加した十三人のうち、人民共和国に残つて当時の模様を回想したのは、董必武、李達、包惠僧、劉仁静の四人だったが、上は国家指導者から下は革命の裏切り者まで、人民共和国の体制のもとで、社会的地位や立場も異なつてしまつたその四人の対応は、実に様々だった。

とりわけ中国共産党からの離党経験を持つ李達、包惠僧、劉仁静の三人の対応は、微妙な違いを見せた。ある者は頑固なまでに、党の「定説」に忠実な証言を

くりかえし、あるものは口をつぐんだ。今日ふりかえると、「七一」説にのっとった回想をするか否かは、かれらが共産党の指導する中国の体制に忠誠を誓うかどうかの政治的踏み絵であったようにさえ見える。



創立七十五周年記念

中国宗教文献研究国際シンポジウム

麥谷邦夫

二〇〇四年十一月十八日(木)から十一月二十一日(日)までの四日間にわたり、時計台記念館において、本研究所以創立七十五周年記念の「中国宗教文献研究国際シンポジウム」が開催された。

今回の国際シンポジウムの特徴は、創立七十五周年記念という研究所の節目となる年に、これも本研究所が中心となって組織した二十一世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」の事業の一環を兼ね、さらに、近年相互の協力関係を強化してきた、フランス国立極東学院およびイタリア国立東方学研究所の協力を得て、三研究所の共催という文字どおりの「国際」シンポジウムとして企画されたことだ

あった。外国からの参加者は、中国、台湾、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、米国からの十五名、これに日本を活動の拠点にしている外国勢四名を含めた日本からの参加者十一名の総勢二十六名であった。

中国宗教の文献学的研究は、本研究所がその前身のひとつである東方文化学院京都研究所の発足以来、今日まで一貫して主要な研究対象とし、多くの成果を挙げてきた分野であり、フランス、イタリアの両研究所も同じくその活動の中心のひとつとしてきた分野である。この三研究所が協力して国際シンポジウムを開催しようという相談が始まったときに、一致して中国の宗教を取り上げようということになったのは、このような三研究所の歴史を踏まえてのことであった。同時に、「漢字文化の全き継承と発展」を目指す二十一世紀COEプログラムとの協働というもうひとつの目的からは、中国の宗教およびその歴史を支えてきた歴大な漢字文献をどのように評価し活用するののかという、これまた重要な問題への関与が要請された。こうして、「中国宗教文献研究国際シンポジウム」という大きな枠組のもと、「仏教文献」「景教・マニ教・イスラム教文献」「道教文献」「中国宗教文献情報学」という四つのセッションが設定され、「漢字と宗教の醍醐味」を求め、多くの人々が集う場が設けられることに

なったのである。

シンポジウム初日は、入倉孝次郎副学長の挨拶と森時彦所長の開会の辞に引き続き、「仏教文献」のセッションから始まった。まず、シンポジウムの全体像を理解していただくために、以下にプログラムの骨子を掲げることとする。

○十一月十八日(木)

〔仏教文献〕 司会 船山徹(京都大学)

1 方広錡(上海師範大学)

〔漢文大蔵経の時期区分と特徴について〕

2 辛嶋静志(創価大学国際仏教学高等教育研究所)

〔仏典漢語詞典の構想〕

3 落合俊典(国際仏教学大学院大学)

〔日本の古写経と中国仏教文献―天野山金剛寺藏平安後期写『優婆塞五戒法』の成立と流伝を巡って〕

〔仏教文献〕 司会 シルヴィオ・ヴィータ

4 王邦維(北京大学)

〔洛州無影―南海寄帰内法伝〕中の一文に関する新考察

5 榎本文雄(大阪大学)

〔仏教研究における漢訳仏典の有用性〕

6 船山徹(京都大学)

〔經典の偽作と編輯―遺教三昧経〕と〔舍利弗問経〕

7 アントニーノ・フォルテ(ナポリ東洋大学)

〔地婆訶羅に関する漢語史料〕

○十一月十九日(金)

〔仏教文献〕 司会 フランソワ・ラシヨ

(フランス国立極東学院)

8 劉淑芬(台湾中央研究院)

〔禪苑清規〕にみえる唐・宋寺院の茶礼と湯礼

9 シルヴィオ・ヴィータ(イタリア国立東方学研究所)

〔唐代の石刻資料にみる僧侶と經典―大蔵経資料を中心として〕

10 ジャン・ロエル・Aロベール(フランス国立高等研究院)

〔竺法護訳『正法華経』における翻訳の方法―第三章『譬喩品』を中心として〕

〔景教・マニ教・イスラム教文献〕 司会 高田時雄

(京都大学)

11 林悟殊(中山大学)

12 マックス・デーグ(ウィーン大学)

〔瓦礫の山から神を掘る―唐代景教文献と研究のイデオロギー〕

13 栄新江(北京大学)

〔唐代の仏教と道教からみた外道―景教徒〕

14 浜田正美(神戸大学)

〔『帰真総義』―中央アジアにおけるその源流〕

○十一月二十日(土)

〔道教文献〕 司会 麥谷邦夫(京都大学)

15 ジュディス・マギー・ボルツ(ワシントン大学)

〔浄明道の祖師許遜にまつわる物語の再検討〕

16 フランシスクス・ヴェレレン(フランス国立極東学院)

〔儀礼の解明―斎に対する陸修静の影響〕

17 モニカ・エスポジト(京都大学)

〔清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』〕

〔道教文献〕 司会 小南一郎/モニカ・エスポジト

(京都大学)

18 李遠国(四川省社会科学院)

〔天書雲篆―道教の符図文献とその分析〕

19 王承文(中山大学)

〔靈宝の「天文」信仰と古靈宝経の教義の展開―敦煌本『太上洞玄靈宝真文度人本行妙経』を中心として〕

20 麥谷邦夫(京都大学)

〔道教類書と教理体系〕

21 小南一郎(京都大学)

〔宝巻と明清の民間信仰―目連伝承を中心として〕

○十一月二十一日(日)

〔中国宗教文献情報学〕

司会 クリスティアン・ウィッテルン(京都大学)

22 釈惠敏(国立台北芸術大学)

〔デジタル化した古籍校勘版本の処理技術―CBETA大正蔵電子仏典を例として〕

23 師茂樹(花園大学)

〔大規模仏教文献群に対する確率統計的分析の試み〕

24 クリスティアン・ウィッテルン(京都大学)

〔唐代ナリッジベースから見た禪宗〕

25 マティアス・アーノルド(ハイデルベルク大学)

〔雲居寺の碑文―CD―ROMのための準備作〕

「道教研究におけるデジタル資源」

与えられた紙数では、これらの発表の詳細について述べることは不可能であるので、以下、全体を通じて筆者の印象に残った発表を中心に紹介することにする。

仏教のセッションでは、方広鎰氏の「漢文大藏経の時期区分と特徴について」が、中国仏教研究の基本文献集成である漢文大藏経について、その定義と適用範囲、成立と流伝、テキストの形態(写本から現代の電子テキストまで)などを論じ、歴史の変遷を踏まえたうえで、今後の新たな方向を展望していて興味深かった。氏の論に対しては、王邦維氏からの疑問が出され、面氏の間で激しい応酬があったことも、いかにも国際シンポジウムらしい一幕であった。

また、辛嶋静志氏の「仏典漢語詞典」の構想」は、漢訳仏典特有の口語的表現や難解な表現の意味を明らかにするためには、個別の初期漢訳仏典毎の語彙・語法研究およびそれに基づく訳者毎の語彙・語法辞典の作成が必要であることを指摘したもので、榎本文雄氏の「仏教研究における漢訳仏典の有用性」とともに、漢

訳仏典研究の今後のあるべき姿を示唆する興味深い発表であった。

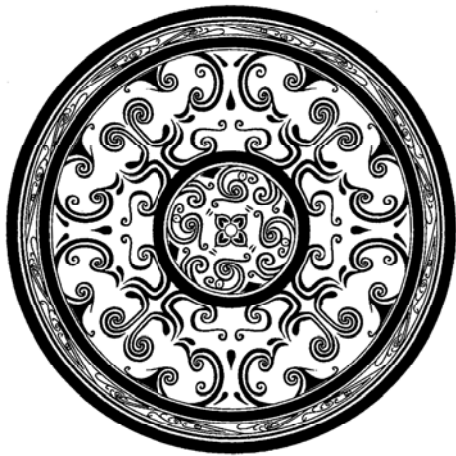
次に、「景教・マニ教・イスラム教文献」のセッションでは、マックス・デアグ氏の「瓦礫の山から神を掘る―唐代景教文献と研究のアイデアオロギー」が、西欧の研究者の一部が唐代景教文献を解釈する際に露呈する、神学的アイデアオロギーを無意識のうちに読みこもうとする傾向を指摘し、客観的実証主義といった概念がいかに危うく脆いものであるか、そしてそのような研究がアジアの文化に対する新たな「超越的オリエンタリズム」の萌芽となりうることを論じていたのが印象的であった。

「道教文献」のセッションでは、李遠国氏の「天書雲篆―道教の符図文献とその分析」が、いわゆる「おふだ」の起源とその効能のよって来たる所以がどのように理解されてきたのかという問題を論じていた。このような、呪術的あるいは方術的なことがらは、従来道教研究(というよりもアカデミズムの宗教研究一般)の中では閑却されてきた問題であり、「おふだ」の現物の蒐集なども含めて今後の展開が期待される。

最後に、「中国宗教文献情報学」のセッションでは、釈惠敏氏の「デジタル化した古籍校勘版本の処理技術―CBETA大正蔵電子仏典を例として」とマテイア

ス・アーノルド氏の「雲居寺の碑文―CD-ROMのための準備作業」とが、ともに漢文仏教文献のデジタル化の現状とその限界を示していて、道教文献について同じようなものの出現を期待している筆者には、大いに参考になった。

今回のシンポジウムでは、中国の主要な宗教である仏教、道教、イスラム教と歴史上にその痕跡を留める景教、マニ教および関連文献に関する多様な報告が行われた。中国には、儒教、祇教(ゾロアスター教)、ラマ教、天主教(カソリック)、基督教(プロテスタント)など、今回取り上げられなかった諸宗教があり、また、民間には様々な民間宗教が存在する。これらについては、次の機会に期待したい。また、本シンポジウムの開催にあたっては、助手諸兄をはじめ多くの教職員のかたがたのお世話になった。この場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。



漢字の誕生

小南 一郎

中国において、漢字という文字体系が形成されたのが何時であり、その形成の原動力となったのがいかなる歴史的な要件であったのかという設問は、中国文明の形成をめぐり、解明を待っている問題点の中でも、特に重要なものの一つであるに違いない。中国の新石器文化においては、その早い段階から符号が使用されていて、各地域、各時期の新石器文化に、それぞれに特徴を持った符号の体系があったことが確かめられている。そうした符号をも文字だと考えて、漢字の起源は新石器時代の古い段階までさかのぼるのだとする主張が、中国の論文や著書に見えている。しかし、符号と文字とは、それらを用いる人々の精神の構造に質

的な差異があり、両者は厳密に区分して考えるべきものであろう。符号の起源が太古の闇の中にまで遡るとは異なり、文字の出現は、歴史的な事件、それも社会発展の転機と関わる大きな事件なのであった。

中国新石器時代に用いられていた符号は、その大部分が、陶器に刻されたもので、きわめて限定された種類の陶器にのみ、そうした符号が付けられている。特に注目すべきは、大汶口文化時期の大口尊と呼ばれる醸造のための陶甕に付けられた符号であって、大口尊は、副葬品の多い、首長クラスと考えられる人物の墓葬から出土する。そうした墓葬からは、酒杯も数多く出土しており、当時の首長たちが、飲酒儀礼を通じて、その配下を取りまとめていたであろうことがうかがわれる。飲酒儀礼は、祖先神を招きおろして行なわれる、共飲の儀式であった。その場の中心に据えられる大口尊に刻された符号は、祖先神の名であり、首長の名であり、部族全体を表わす記号であったのだろう。

大口尊に符号を付けるという伝統は、初期王朝の形成期に当たる、二里頭・二里岡文化期まで引き継がれていた。その後を継いだ安陽殷墟文化期になると、陶器に符号を付けるという伝承は遺っているが、その対象は大口尊だけに限られなくなる。中国新石器文化を通じての伝統であった、特定の、おそらく宗教的な性

格の強い容器にのみ、符号を付けるという規制が弱くなったのである。この安陽期に、甲骨の上に刻された文字が出現したと、符号をめぐる規制の解除とは、相互に関連した現象であったのだろう。

動物の骨を焼いて占卜を行っていた証拠は、中国の新石器遺跡の中にもいくつも発見されている。しかし、占卜を行なった甲骨に、占いの内容とそれに対する支配者の判断や実際に起った事件を記すのは、安陽期の前半、武丁の時期に、ほとんど突然のようにして始まった。武丁時期の甲骨文の記録では、殷王が占卜の結果を凶だと判断した場合に特に詳しく記されている。そうした文字記録システム成立の背景には、時代の大きな変化があり、王の行動や判断を文字に定着することによって、その権威を高め、社会の安定をめざそうとする人々の強い意向があったものであろう。青銅器に、単なる符号でなく、文章が鑄出されるようになるのもまた、安陽期末年の社会的変動の中においてなのであった。

古代シユメールの土地制度

——一枚の粘土板からなにが読みとれるか——

前川 和也

南部メソポタミアでシユメール人の統一王朝時代（ウル第三王朝時代、前二世紀）に行なわれていた農業制度についてお話しします。

古代メソポタミアの地から出土する粘土板文書の九割は行政・経済記録です。そしてウル第三王朝時代にもっともみことな行政・経済文書が書かれました。さて大公共組織の書記は、数百枚の小粘土板から得られる情報を参照して、最終会計（あるいは行政）報告を作成しました。だから、大きな一粘土板を分析するだけで、公共組織の全体像を把握できる。この手法がもっとも有効なのは、ウル王朝の農業生産の核地域であるギルス（リラガシユ）についてです。ここでは、ギルス出土の大型粘土板 *Maekawa, Zinbun 21 Text 37 (BM 23622+28004)* を用います。得られる結論は、当時の土地制度一般に敷衍できます。 *Zinbun 21 Text 37* は「ナムカニの家」が、ある年度に経営した

耕地についての最終記録です。「ナムカニの家」は、ギルスの公共耕地経営を任された約一〇の大組織のひとつです。

「ナムカニの家」の耕地は、直営地、割当地、小作地で構成されていますが、直営地は、人々の保有が認められている土地（割当地および小作地）とは共存しない。割当地と小作地は都市集落近くに位置して、いっぽう直営地は集落から遠くはなれています。直営地にくらべ、割当地と小作地は塩害のため生産力が低下していました。逆にいえば、塩害を避けるために、都市から離れた土地が直営地として開発されたのです。

文書にみえる割当地保有者の職業はかたよっている。通常の「家」で働く人々（たとえば手工業職人）は含まれず、耕地を耕作する人と収穫物の貯蔵・管理にかかわる人だけが登場する。「ナムカニの家」は自立的な「家」ではなく、耕地経営のための組織に再編成されているからです。さて文書には割当地面積とともに、大麦量が記録されている。じっさいには割当地ではなく、大麦が与えられているからです。そして割当地の生産力は、きわめて低く査定されています。ほとんどの場合、基準生産力水準の五〇%にも達しません。

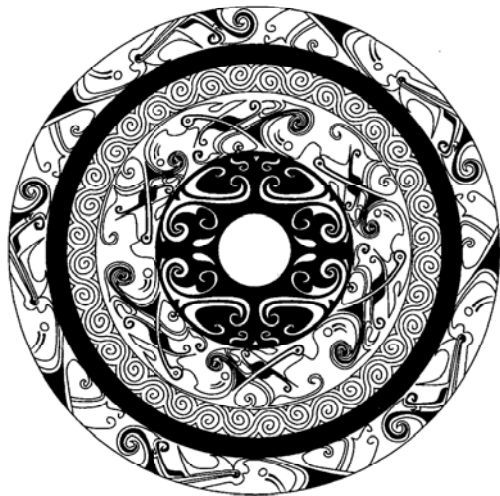
小作地を借地している人が支払うべき小作料は、銀と大麦の二本立てです。小作地は、単位面積について

支払う銀の額のうちがいで四ランクに等級分けされていて、大麦納の量も、銀納のランクと見事に対応しています。収穫が本格的に始まる直前に一部で試刈りが行なわれ、土地の生産力が査定される。それに応じて小作地が四ランクに分けられ、また支払うべき銀や大麦の量が決定されるのです。銀と現物納部分を加えた小作料全額は、収穫の三分の一ないし二分の一と決められていたかもしれない。ただ小作料契約は、いったん締結されれば、少なくとも数年間は継続されていたはず。だから小作料は数年のあいだは定額です。とすれば、Zinbun 21 Text 37は、割当地の基準収量を設定するために、また小作料を設定するために、数年にいちどだけ作成される報告書なのかもしれません。そうであれば、この種の文書を他にほとんど発見できないことも、多少は納得できます。

小作地については、「ナムカニの家」記録とはべつに、いくつか総括文書がのこっています。ここでも、小作料の決め方や借地人の社会層について同一結論を得ることができる。とりわけ、有力者が一族で土地集積をはかっているという事実がわかる。彼らは低小作料、低生産力の土地を広く借地しているのです。彼らは何年かかけて生産力を上昇させて、土地から利益を得ようとしたにちがいない。これは当局の利害と合致

したはず。当時塩化がすすんで、一部では耕地放棄もおこっていたでしょう。また土地を新開発する必要がある。そのような低生産力の土地の経営を、当局は有力者たちに委ねたと思われまます。

「ナムカニの家」文書は、ウル第三王朝時代の土地制度が都市国家時代のそれとはたいへんに違っていたことを教えてくれます。都市国家時代については、直営地、割当地、小作地が同一耕地区内に共存する理念型を描くことができる。割当地を保有する人々が直営地を耕作したからです。ところが都市国家体制が崩壊するとともに、耕地の生産力が下落しました。そのため当局の収入に直結する直営地は、都市より遠く離れた土壌塩化がまだ深刻でないところへと移っていく。その結果公共耕地の全面積が拡大します。これが南部メソポタミアでの都市国家から領域国家への〈発展〉を決めました。ウル第三王朝時代には、生産力の低い土地が割当地として活用されましたが、じっさいには、「割当地」は土地として与えられるのではなく、大麦俸禄に変わっている。いっぽう富裕者層が低生産力の土地を広い面積で借地しています。土地の再開発がはじまっていたのでしよう。国家の力が弱まれば、これらの小作地は私有地にかわっていくでしよう。



人のうごき

。堂山英次郎（人文学研究部）助手は辞任の上（四月一日付）、大阪大学大学院研究科講師に就任。
 。古勝隆一（東方学研究部）助手は辞任の上（四月一日付）、千葉大学文学部助教に就任。
 。大浦康介（人文学研究部）助教は当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。
 。田中雅一（人文学研究部）助教は当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。
 。藤井正人（人文学研究部）助教は当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。
 。加藤和人（人文学研究部）助教は大学院生命科学研究所助教に併任（四月一日～二〇〇五年三月三十一日）。
 。丸山宏名城大学農学部教授は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日

て第三屆兩岸三地藏緬語族語言学研究会に出席及び報告を行い、四月十九日帰国。
 。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月二十九日大阪発、シドニー大学に於いて新旧キリスト教ミッション出版資料の調査を行い、五月三日帰国。
 。ウィッテルン、クリステイアン助教（附属漢字情報研究センター）は、五月十一日大阪発、ベルギー・ロイヤルアカデミーに於いてTEIテクニカル・カウンシル年次会議に出席し、五月十七日帰国。
 。李俊植外国人研究員は、五月十九日大阪発、延世大学に於いて「日本のファシズム体制と朝鮮知識人」シンポジウムに出席し、五月二十三日帰国。
 。富永茂樹教授（人文学研究部）は、四月二十三日大阪発、フランス・社会科学高等研究院、国立図書館及びポルトガル・コインブラ大学に於いてフランス革命に関する資料収集を行い、五月二十八日帰国。
 。曾布川寛教授（東方学研究部）は、六

（二〇〇五年三月三十一日）。

。緒形康神戸大学文学部助教は、客員助教（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇五年三月三十一日）。
 。矢木毅宮崎大学教育文化学部助教を当研究所（東方学研究部）助教に採用（四月一日付）。
 。倉島哲氏を助手（人文学研究部）に採用（四月一日付）。
 。李昇燁氏を助手（人文学研究部）に採用（四月一日付）。
 。山崎岳氏を助手（附属漢字情報研究センター）に採用（四月一日付）。
 。高井たかね氏を助手（附属漢字情報研究センター）に採用（八月一日付）。
 。田辺明生大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教は当研究所（人文学研究部）助教に配置換（十月一日付）。
 。王寺賢太氏を助教（人文学研究部）に採用（二〇〇五年一月一日付）。
 。小南一郎（東方学研究部）教授は定年

月一日大阪発、河北省文物研究所、山西省考古研究所、大同市博物館、遼寧省博物館、遼寧省文物研究所、北京国家博物館及び中国社会科学院考古研究所に於いて中国美術に関する出土文物の調査を行い、六月九日帰国。
 。高田時雄教授（東方学研究部）は、六月十日大阪発、輔仁大学に於いて二〇〇四年古籍学術講演会に出席及び講演を行い、六月十三日帰国。
 。ウィッテルン、クリステイアン助教（附属漢字情報研究センター）は、六月九日大阪発、中華仏学研究所に於いて「XML Text Processing」ワークショップに出席し、六月十四日帰国。
 。古松崇志助手（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、三月八日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて中国近代史研究のための漢籍文献史料調査を行い、六月十五日帰国。
 。麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、六月十七日大阪発、青島・太清宮、北京大学及び国家図書館に於いて調査及び道教関係資料蒐集を行い、六月二十二日

により退職（二〇〇五年三月三十一日付）。

。前川和也（人文学研究部）教授は定年により退職（二〇〇五年三月三十一日付）。
 。真下裕之（東方学研究部）助手は辞任の上（二〇〇五年三月三十一日付）、神戸大学文学部助教に就任。
 。村上衛（東方学研究部）助手は辞任の上（二〇〇五年三月三十一日付）、横浜国立大学大学院国際社会科学研究所助教に就任。

海外での研究活動

。龍谷直人助教（人文学研究部）は、三月二十八日大阪発、台湾中央研究院に於いて海外華人研究学会に出席及び研究報告を行い、四月三日帰国。
 。宇佐美齊教授（人文学研究部）は、三月五日大阪発、フランス、トゥールーズ・ル・ミライユ大学及び国立東洋言語文化研究所に於いて講義、講演及び文献資料調査を行い、四月十日帰国。
 。池田巧助教授（東方学研究部）は、四月十六日大阪発、香港城市大学に於いて

帰国。
 。竹沢泰子助教（人文学研究部）は、七月十三日成田発、全米日系博物館に於いて日系レガシイプロジェクト会議に出席、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、バークレー校及びハーバード大学に於いて国際交流基金アジア系アメリカ人調査を行い、七月二十五日帰国。
 。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、七月二十三日大阪発、中国国家図書館に於いて国際ワークショップ開催に関する打合せを行い、七月二十七日帰国。
 。曾布川寛教授（東方学研究部）は、七月十六日大阪発、四川大学博物館、四川省博物館、綿陽市博物館、漢中市博物館及び国家博物館等に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、八月四日帰国。
 。山室信一教授（人文学研究部）は、七月二十三日大阪発、バンコク及びマニラの戦跡記念碑、戦争記念館及び博物館等に於いて「アジアにおける記憶遺産と調査活動」に関する調査を行い、八月六日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月九日大阪発、ソウル大学校奎章閣及び韓国精神文化研究院に於いて李朝期資料調査を行い、八月十三日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究所）は、八月六日大阪発、中国国家博物館、故宫博物院、甘肅省博物館、武威博物館等に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、八月十六日帰国。

。小南一郎教授（東方学研究所）は、八月二日大阪発、北京大学に於いて第一回北京フォーラムに参加及び論文発表を行い、八月二六日帰国。

。宮宅潔助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十八日大阪発、ミュンスタール大学及びベルリン自由大学に於いて中国古代法制史の研究に関わる資料調査及び研究打合せを行い、八月三十日帰国。

。エスポジト、モニカ助教授（東方学研究所）は、七月十八日大阪発、コレージュ・ド・フランス図書館及びフランス極東学院に於いて道教に関する資料収集及び会議に出席し、八月三日帰

国。

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二六日大阪発、中央民族大学、西南民族大学及び民族研究所に於いて資料収集、康定に於いてムニャ語及びカム方言の記述調査を行い、九月三日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二九日大阪発、中国・日照、濰防、栖霞及び煙台に於いて稲作遺跡調査を行い、九月八日帰国。

。古松崇志助手（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、八月二五日大阪発、フフホト内蒙古文物考古研究所に於いて「内蒙古文物考古研究所成立五十周年国際会議」に出席、報告及び資料調査を行い、遼慶州遺跡、巴林右旗博物館、中京遺跡等に於いて史料、遺跡、古跡調査及び研究打合せを行い、九月九日帰国。

。坂本優一郎助手（東方学研究所）は、文部科学省在外研究員旅費により、二〇〇三年九月十五日大阪発、ロンドン大学に於いてロンドン・シティと財政

軍事国家の関係に関する研究を行い、九月十四日帰国。

。佐野誠子助手（東方学研究所）は、八月十六日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて魏晉南北朝の祠廟文化と文学の関係に関する調査研究を行い、九月十四日帰国。

。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、八月十六日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて明代倭寇に関する調査及び資料収集を行い、九月十四日帰国。

。竹沢泰子助教授（東方学研究所）は、九月十二日成田発、ワシントンDCに於いて人種とヒトの多様性に関する専門家会議に出席し、スミソニアン博物館及びジョージ・ワシントン大学に於いて資料収集を行い、九月十七日帰国。

。村上衛助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月五日大阪発、中国常習市武進区における現地調査、常習市档案馆等に於ける資料収集を行い、九月十八日帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先

方負担）により、九月九日大阪発、中国社会科学近代史研究所に於ける學術講演、中国国家図書館、徐州師範大学及び上海図書館等に於いて資料調査を行い、九月二二日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究所）は、九月十九日大阪発、英国ケンブリッジ、クラウンプラザ・ホテルに於いて開催の国際ハップマップ計画第五回運営会議に出席し、九月二三日帰国。

。岡田暁生助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十一日大阪発、ベルリン国立国会図書館及びパーゼル大学図書館に於いて十九世紀ピアノ音楽における技術の諸相に関する資料調査を行い、リスト音楽院で開催の国際シンポジウムでパネラーを務め、九月二五日帰国。

。藤原辰史助手（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二二日大阪発、フンボルト大学及びWELEDA本社に於いて初期有機農業史料収集を行い、九月二六日帰国。

。李昇燁助手（人文学研究所）は、九月十三日大阪発、釜山市立図書館、国立

中央図書館、国史編纂委員会及び韓国精神文化研究院に於いて戦前朝鮮在住日本人社会関係資料調査を行い、九月二七日帰国。

。冨谷至教授（東方学研究所）は、三月二二日大阪発、ミュンスタール大学に於いて東アジア世界の法制に関する比較史的研究を行い、九月二九日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究所）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、七月一日大阪発、香港中文大学及び香港北部・広東省南部地域に於いて香港における客家語の衰退に対する広東語の支配的影響に関する社会言語学的調査及び関連資料収集を行い、九月三十日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二二日成田発、中国・安岳及び大足に於いて石窟調査を行い、九月三十日帰国。

。船山徹助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十月十三日大阪発、ブリティッシュ・コロンビア大学に於いて

てシンポジウム「アジアの仏教聖地」に出席・発表及び中国六朝仏教史に関する資料収集を行い、十月二十日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二七日大阪発、シンガポール、オーチャード・パレード・ホテルに於いて開催の平成十六年度アジア太平洋シンポジウムに出席・発表を行い、十一月二日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二五日大阪発、陝西省及び山西省の古代遺跡の調査を行い、十一月四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月一日大阪発、上海図書館に於いて徐家匯蔵書樓におけるキリスト教ミッション関連資料調査を行い、十一月五日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究所）は、十月二八日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて現存ヴェーダ伝承に関する共同研究打合せ及び資料収集を行い、十一月

六日帰国。

。宮宅潔助教授（東方学研究所）は、十一月十一日大阪発、忠北大学に於いて中国簡牘学国際学術大会に出席及び発表を行い、十一月十四日帰国。

。藤井律之助手（東方学研究所）は、十一月十一日大阪発、忠北大学に於いて中国簡牘学国際学術大会に出席及び発表を行い、十一月十四日帰国。

。岡田暁生助教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十二日大阪発、ヴェネチア音楽院及びパリ国立図書館音楽部に於いて十九世紀ピアノ音楽に関する資料調査を行い、十一月二十日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、十一月十七日大阪発、中央研究院中国文哲研究所に於いて「経典轉化與明清叙事文学」学術研究会に参加及び論文発表を行い、十一月二二日帰国。

。田中淡教授（東方学研究所）は、十一月二二日大阪発、中央研究院台湾史研究所に於いて「第二回被殖民地都市と建築—本土文化と殖民」国際シンポジウムに出席及び発表を行い、十一月二

六日帰国。

。村上衛助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月二二日大阪発、中央研究院近代史研究所に於いて中国近代経済史に関する史料収集を行い、十二月二日帰国。

。坂本優一郎助手（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月二二日大阪発、ロンドン大学、イングリッド銀行及びケンブリッジ大学に於いてイギリス財政革命の政治的・社会的影響に関する研究打合せ及び史料収集を行い、十二月三日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究所）は、十二月二日大阪発、韓国・大雄経営開発院に於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」に出席し、十二月五日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、十二月二日大阪発、韓国・東亜大学に於いて国際シンポジウム「東アジアの記憶における満州」に出席・講演及び史料調査を行い、十二月六日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金（一部

先方負担）により、十二月六日大阪発、

台湾国家図書館に於いて数位時代漢学資源国際研討会に出席及び報告、台湾大学図書館に於いて研究打合せを行い、十二月十一日帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二二日大阪発、上海市档案馆に於いて共同租界警察に関する資料調査を行い、十二月二六日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二四日大阪発、香港城市大学及び西南民族大学に於いて東チベットの地名と民族語の分布に関する研究打合せ及び資料収集を行い、二〇〇五年一月三日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究所）は、二〇〇五年一月六日大阪発、中国人民大学で開催の中日学者清史研究座談会に於いて学術報告を行い、二〇〇五年一月八日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年一月六日大阪発、中央民族大

学ならびに蔵学研究中心に於いてムニャ語及びカム方言の記述調査を行い、二〇〇五年一月十二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月十七日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて唐代ナリツジベースに関する打合せ及び若手研究者の実習打合せを行い、二〇〇五年一月十九日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、二〇〇五年一月十八日大阪発、成均館大

学校に於いて国際シンポジウム「東アジア近代知性の東アジア認識」に出席・講演を行い、二〇〇五年一月二二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫の新技術」に出席及び研究打合せを行い、二〇〇五年一月二四日帰国。

。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫の新技術」に出席及び研究打合せを行い、二〇〇五年一月二四日帰国。

。守岡知彦助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫の新技術」に出席及び報告を行い、二〇〇五年一月二四日帰国。

。安岡孝一助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫の新技術」に出席及び報告を行い、二〇〇五年一月二四日帰国。

。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二十日大阪発、中国国家図書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫

の新技術」に出席及び研究打合せを行い、二〇〇五年一月二四日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究所）は、二〇〇五年一月十九日成田発、ハーヴァード大学に於いて人種に関する資料収集及び研究打合せを行い、二〇〇五年一月二六日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年一月十五日大阪発、国立シンガポール大学に於いてインド系質屋の研究及び文献収集・調査を行い、二〇〇五年一月三十日帰国。

。田中祐理子助手（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年一月二五日大阪発、ロンドン大学に於いて十九世紀微生物学研究に関する資料収集を行い、二〇〇五年一月三一日帰国。

。ウイッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年一月二五日大阪発、中華仏学研究所及び中華電子仏典協会に於いて唐代ナリツジベースについての研究

打合せを行い、二〇〇五年二月一日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、二〇〇五年一月二十九日大阪発、ソウル大学に於いて韓国社会史学会特別シンポジウムに出席及び資料調査、国家記録院に於いて資料調査を行い、二〇〇五年二月五日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年二月二三日大阪発、ソウル大学図書館に於いて中国学関係資料調査、韓国精神文化研究院に於いて韓国寓言文学会二〇〇五年度東亜国際学術大会に出席及び論文発表を行い、二〇〇五年二月二六日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、二〇〇五年二月二二日大阪発、ミャンマーに於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」についての調査を行い、二〇〇五年二月二七日帰国。

。竹沢泰子助教（人文学研究部）は、二〇〇五年二月二一日成田発、ブルックリンス研究所、ニューヨーク州立大学及びハーヴァード大学に於いてアジア

ア系アメリカ人研究者の対アジア意識に関するインタビュー調査を行い、二〇〇五年三月一日帰国。

。守岡知彦助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年二月二七日大阪発、中国国家図書館及び北京新世紀日航飯店に於いて日中共同ワークショップ「漢字文献資料庫の新技术」に出席及び研究打合せを行い、二〇〇五年三月四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年二月二六日大阪発、プロイセン財団法人立図書館及びオーストリア国立図書館に於いてヨーロッパ現存中国学資料収集及び調査を行い、二〇〇五年三月五日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月一日大阪発、中山大学に於いて江南道教に関する研究打合せ、雲南省社会科学院等に於いて道教遺跡の調査及び資料蒐集を行い、二〇〇五年三月六日帰国。

研究に関する文献調査及び資料収集を行い、二〇〇五年三月十九日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月五日大阪発、イスラミヤ大学、バンジャール大学及び政策学研究所等に於いて「インド北西部における都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究」に関わる現地調査・文献調査を行い、二〇〇五年三月二十日帰国。

。高井たかね助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年三月十日大阪発、蘭州市、西寧市、張掖市、酒泉市及び敦煌市等に於いて壁画、唐代仏教美術及び唐代城址に関する調査を行い、二〇〇五年三月二一日帰国。

。籠谷直人助教（人文学研究部）は、日本学術振興会受託研究費により、二〇〇五年三月十八日大阪発、香港大学に於いて第十六回人類学研究会に出席し、二〇〇五年三月二一日帰国。

。船山徹助教（東方学研究部）は、二〇〇五年三月十四日大阪発、中華仏学

外国人研究員

。岡村秀典助教（東方学研究部）は、二〇〇五年三月二七日福岡発、旅順博物館に於いて遼東の遺跡調査を行い、二〇〇五年三月三一日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月十二日大阪発、広東省海豊県に於いてシヨオ語の記述調査及び資料収集を行い、二〇〇五年三月二七日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、二〇〇五年三月二四日大阪発、漢陽大学に於いて韓日中国語学国際会議に出席及び論文発表を行い、二〇〇五年三月二五日帰国。

研究所に於いてインド仏教史に関する研究打合せを行い、二〇〇五年三月二三日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月三日大阪発、中国国家図書館に於いて中国近世出版資料調査を行い、二〇〇五年三月六日帰国。

。森本淳生助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月一日大阪発、フランス国立図書館及びクレルモン・フェラン大学に於いてヴァレリー「若きバルク」に関する資料調査を行い、二〇〇五年三月十三日帰国。

。田辺明生助教（人文学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇五年三月十一日大阪発、ヤングン大学に於いて国際会議「イワラジデルタにおける村民の暮らしと農業環境の変容」に出席及びバガン仏教遺跡視察を行い、二〇〇五年三月十六日帰国。

。真下裕之助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇五年三月十三日大阪発、バンジャール大学図書館に於いて前近代インドにおけるイスラーム諸国家制度の動態的

期間 二月一日～九月十六日

。MARMANDE, Francis パリ第七大

学教授
ジョルジュ・バタイユの日本における
受容
（文化生成研究客員部門）

期間 四月一日～七月三十一日
受入教員 大浦教授

。范 金民 南京大学歴史系教授
清代契約文書の研究
（文化生成研究客員部門）
受入教員 岩井教授

期間 八月十五日～
二〇〇五年二月十四日

。HANLEY, Susan Bell ワシントン
大学名誉教授
日本の家屋・家族・社会、一六〇〇年
から現代まで一ひとつの文化研究
（文化連関研究客員部門）
受入教員 横山教授

期間 十一月二日～
二〇〇五年二月二八日

。DOUMET, Christian パリ第八大
学教授
ヴィクトル・セガレンの「エグゾテイ

スム」と文化交流

(文化生成研究客員部門)

受入教員 大浦教授
期間 二〇〇五年三月一日、
二〇〇五年六月三十日

。CHAN, Hing Ho フランス国立科学
研究センター研究員
二十世紀以前東アジア国際往来者漢文
資料の整理と研究

(文化連関研究客員部門)

受入教員 高田教授
期間 二〇〇五年三月一日、
二〇〇五年八月三十一日

招聘外国人学者

。SMITH, Henry ロンビア大学東
アジア学科学教授
浪曲における赤穂義士の研究

期間 四月一日〜十二月三十一日
池上英子 ニュー・スクール大学
院教授
祇園祭の歴史社会学的研究

受入教員 高木助教授
受入教員 高木助教授
期間 四月六日〜七月二十日

。黄 蘭翔 中央研究院台湾史研究所副
研究員
中国仏教寺院の平面配置の形成過程に
関する研究

受入教員 田中淡教授
期間 七月十四日〜九月三十日

。蔡 榮婷 国立中正大学中国文学系副
教授
祖堂集中禪宗詩偈研究
受入教員 高田教授
期間 七月十五日〜七月二十九日

。鍾 淑敏 中央研究院台湾史研究所助
研究員
アジア・ネットワークにおける台湾商
人の活動
受入教員 籠谷助教授
期間 七月十五日〜八月三十一日

。陳 昭容 中央研究院歴史語言研究所
副研究員
先秦金文研究 ―青銅器銘文から两周
時期の家族と婚姻をみる
受入教員 浅原教授
期間 八月十六日〜九月十日

。祝 平一 中央研究院歴史語言研究所
副研究員
受入教員 小南教授
期間 十二月一日〜十二月三十一日

。王 建軍 西北大学応用社会学部教授
清末中国留日学生と近代中国政治
受入教員 森教授
期間 二〇〇五年二月二日、
二〇〇五年八月一日

。KLIMBURG-SALTER, Deborah
ウィーン大学芸術史研究所教授
五一九世紀アフガニスタンの考古美術
的研究
受入教員 稲葉助教授
期間 二〇〇五年三月十五日、
二〇〇五年三月二十八日

。金 孝真 ハーバード大学人類学博士
課程
「京都都心部における京町屋再生運動
と地域アイデンティティの変化」に関
わる研究
受入教員 高木助教授
期間 二〇〇三年九月十二日、
二〇〇五年八月三十一日 (継続)

。HENRY, Todd Andrew カルフォル
ニア大学ロサンゼルス校歴史学研究所
博士課程
植民地朝鮮の都市史についての研究
受入教員 水野教授
期間 四月一日、
二〇〇五年三月三十一日

。梁 仁實
日本の視覚メディアにおける「朝鮮」
表象
受入教員 水野教授
期間 四月一日、
二〇〇六年三月三十一日

。FORTE, Erika Angela ナポリ東洋
大学考古学センター研究協力員
唐宋期龍門の中核寺院大奉先寺の研究
受入教員 曾布川教授
期間 十一月二七日、
二〇〇五年十一月二六日

外国人共同研究者

。YAMAMURA, Kozo フシントン大
学国際関係学部名誉教授
国際比較経済史分析のための言語問題
の考察
受入教員 横山教授
期間 十一月二六日、
二〇〇五年二月二八日

。張 季琳 中央研究院中国文哲研究所
助研究員
日本における中国古典文学の研究調査

中国近世科学史の研究

受入教員 武田教授
期間 九月十四日〜十一月十二日
。阿 風 中国社会科学院歴史研究所副
研究員
中国明清時代における法律・裁判文書
の研究
受入教員 岩井教授
期間 九月十五日〜十二月十三日

。趙 誠乙 亜州大学校人文大学史学専
攻教授
戦後日本における韓国学研究与韓国学
界の影響
受入教員 金教授
期間 九月十六日、
二〇〇五年二月二八日

。HUANG, Chi-chang Hobart &
William Smith Colleges 教授
Pilgrims, Lay Buddhists, and Buddh-
ist Identity in the Jiang-Zhe Region
during the Yuan Dynasty
受入教員 ウィッテルン助教授
期間 九月二十日〜十二月十九日

。陳 玉美 中央研究院歴史語言研究所
副研究員

。LAPTEV, Sergey
漢字文化の拡大に関する考古学研究
受入教員 岡村助教授
期間 二〇〇三年十月一日、
二〇〇五年三月三十一日 (継続)

外国人研究生

。LAPTEV, Sergey
漢字文化の拡大に関する考古学研究
受入教員 岡村助教授
期間 二〇〇三年十月一日、
二〇〇五年三月三十一日 (継続)

二十世紀前半における台湾考古学

受入教員 岡村助教授
期間 十月十五日〜十二月十五日
。LEDDEROSE, Lohar ハイデルベ
ルク大学東アジア美術史研究所 Chair
房山石經の研究
受入教員 田中淡教授
期間 十月十五日〜十二月十九日

。SALOVA, Dia カレル大学第一医
学部医学部門講師
東アジアにおける医学言説の歴史的研
究
受入教員 武田教授
期間 十一月二十日、
二〇〇五年十一月十九日

。YAMAMURA, Kozo フシントン大
学国際関係学部名誉教授
国際比較経済史分析のための言語問題
の考察
受入教員 横山教授
期間 十一月二六日、
二〇〇五年二月二八日

。張 季琳 中央研究院中国文哲研究所
助研究員
日本における中国古典文学の研究調査

。AMES, Christopher
沖繩のアメリカカ村ーグローバルな軍事
戦略とローカルな経済復興戦略の不安
定な関係

受入教員 田中雅一教授
期間 二〇〇三年十月一日、
十二月三十一日(継続)

。DE GANON, Pieter Sebastian
日本文化における肉食(一七五〇年—
一九〇五年)

受入教員 高木助教
期間 九月一日、
二〇〇五年八月三十一日

。ODA, Ennai Shouti
在日ブラジル人と他の移民・マイノリ
ティとの関係に関する実証的研究

受入教員 竹沢助教
期間 十月一日、
二〇〇五年九月三十日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇四年度漢籍担当職員講習会(初
級)
第一日(十月四日)
漢籍について

東京大学東洋文化研究所教授

大木 康

漢籍目録の構造 漢籍整理の基礎

文学研究科助教 宇佐美文理

カードの取り方ー漢籍整理の実践

山崎 岳

第二日(十月五日)

工具書について 藤井律之

漢籍目録カード作成実習

第三日(十月六日)

文字コードとテキスト処理の歴史

ウィツテルン、クリスティアン

目録検索とデータベース検索

安岡孝一

漢籍データベースについて

高田時雄

漢籍データベース実習(一)

第四日(十月七日)

漢籍目録を読む

千葉大学文学部助教 古勝隆一

漢籍データベース実習(二)

第五日(十月八日)

NII総合目録データベースと全国

漢籍データベース

国立情報学研究所教授 宮澤 彰

実習解説

梶浦 晋

。二〇〇四年度漢籍担当職員講習会(中

級)

第一日(十一月八日)

四部分類概説

宮宅 潔

中国目録学史(一)

諸子百家から子部書へ

武田時昌

叢書ー漢籍分類の特色

梶浦 晋

第二日(十一月九日)

中国目録学史(二)

中国の写本について

滋賀医科大学医学部助教

辻 正博

叢書と漢籍データベース

安岡孝一

漢籍データベース実習(一)

第三日(十一月十日)

中国目録学史(三)

朝鮮の漢籍について

漢籍データベース実習(二)

第四日(十一月十一日)

矢木 毅

現代中国書について

村上 衛

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十二日)

『東洋学文献類目』について

富山大学人文学部助教 森賀一恵

実習解説

梶浦 晋

お知らせ

四月十四日 華中師範大学校長 馬 敏

他三名(森、石川、村上が応接し

た)

六月四日 中国社会科学院近代史研究所

研究員 劉 小萌他三名(岩井が応

接した)

十月二六日 ロシア科学アカデミー東洋

学研究所サントク・ベテルブルク支

所・所長 ポホワ・イリーナ(高田

が応接した)

十月二九日 首都師範大学歴史系教授

梁 景和他一名(森、村上が応接し

た)

十一月十日 中国社会科学院歴史研究所

研究員 陳 高華他一名(金、岩井

古松が応接した)

十二月十四日 ローマ大学東方研究院・

院長 フェデリコ・マシーニ(高田

中西が応接した)

十二月二十日 中央研究院台湾史研究所

研究員 黄 富三(森、岩井、村上、

山崎が応接した)

二〇〇五年一月十七日 成均館大学校東

アジア学術院尊経閣・館員 IEE,

Chang-Hyeong 他三名(井波、安岡

ウィツテルン、守岡が応接した)

二〇〇五年一月十八日 韓国延世大学国

学研究院教授 白 承哲他十一名

(水野、李が応接した)

二〇〇五年一月十九日 国立台湾師範大

学教授兼文学院長 呉 文星、中央

研究院台湾史研究所研究員兼副所長

陳 慈玉他十名(森、水野、金、岩

井、籠谷、村上が応接した)

二〇〇五年一月二六日 中央研究院歴史

語言研究所・所長 王 汎森(森、

高田、岩井、石川、古松、村上、山

崎が応接した)

二〇〇五年一月二八日 中国人民大学清

史研究所副所長 黄 興濤(森、岩

雲岡石窟の出土品

岡村 秀典

人文研には東方文化学院のときから収集してきた出土物がたくさんある。ごく一部の見栄えのするものは北白川分館の廊下に陳列しているが、故水野清一教授らが中国やイラン・アフガニスタン・パキスタンで発掘した土器や瓦の破片などは、木箱につめこまれたまま分館の収蔵庫に山積みされている。このところ圖書の増加にともなうて収蔵庫の考古資料がだんだん隅に追いやられてきたので、眠ったままの「がらくた」に日の目をあてる整理作業を数年前よりはじめた。

一九三八―一九四四年の雲岡石窟（山西省大同市）の調査とその報告書『雲岡石窟』全一六卷三二冊は、人文研の誇るべき「たからもの」のひとつであり、あらためて紹介するまでもないだろう。その調査では石窟の前面や台地上などの発掘によって石窟に付属する寺院の遺構がみつきり、大量の瓦や土器などが出土したのであるが、なぜか出土遺物についてはほとんど報

告されることがなかった。しかし、半世紀前と比べて考古学の研究方法が進んだこともあって、それらの「がらくた」を詳しく調べてみたところ、学術的価値の高い「たからもの」であることがわかってきた。

雲岡石窟が開鑿された北魏代のものに「傳祚無窮」の四字をいれた軒先瓦がある。それは木型（范）に粘土を押し当ててつくられているが、長年にわたって范を使っていたので、范の損傷がだんだん進行していった。製品となった瓦の表面を詳しく観察すると、そうした范の傷みぐあいから瓦の製作順序が明らかにできる。そのことを発見したのが、整理を手伝っていた大学院生の向井佑介さんである。向井さんの研究によれば「傳祚無窮」瓦は三期に分けられる。第一期は第三洞の台座につくられた寺院である。雲岡石窟を開いた曇曜がインド僧とともに経典を翻訳したところである。第二期は石窟の第九・第一〇洞と方山永固陵である。これは第九・第一〇洞の年代論に大きな波紋を投げかけることになった。当研究所の故長廣敏雄教授らは彫像の美術様式からそれを四七〇年代中ごろに比定していたのたいして、北京大学の宿白教授は北京大学図書館でみずから発見した「金碑」の記載をもとに四八〇年代と考証し、論争になっていたのである。

同時期の瓦が出土した方山永固陵は四八〇年代に造営された文明太皇太后の墓であるから、この瓦編年は宿白説を支持することになる。最後の第三期は、西方諸洞の台上にある寺院址と石窟の東一キロにある西梁廢寺址である。これは洛陽に遷都する四九〇年代のものだろう。

西部台上寺院址からは緑色の釉薬を塗った瓦が出土している。「南齊書」魏虜伝は北魏のみやこ平城では宮殿に琉璃の瓦を用いていたと伝えるが、これまで一枚も発見されていなかった。それが四九〇年代の僧院と考えられる寺院址で出土したのである。それは「南齊書」の記述を裏づけただけでなく、中国最古の釉瓦としても貴重である。「傳祚無窮」瓦とともに分館北側の廊下に展示しているので、ぜひ注意してみしてほしい。

遼金代の雲岡石窟では十一―十二世紀に木造の仏殿が建てられた。その経緯は宿白教授の発見した「金碑」に明らかで、石窟前で発掘された建築遺構や瓦によってもうかがえる。石窟の中心大仏をもつ第二〇洞からは「統四年」の文字を刻んだ瓦片が出土している。「雲岡石窟」の報告書ではこれを遼の乾統四年（一一〇四）に比定したが、むしろ「金碑」によって

金の皇統四年（一一四四）と考えるのが妥当であろう。このような瓦とともに遼金代の陶磁器も大量に出土している。そのうち壺の破片は、底部中央に「寿□」の二文字、高台内面に手慣れた楷書体で「通楽館置」と墨書している。前者の不明の一字は他とちがう記号風の筆致だが、「昌」の草書体で遼の年号「寿昌」（一一〇九五―一一〇〇）を記したものかもしれない。後者の墨書はこの壺を置いたところが「通楽館」であることを示したものだ。この「通楽」こそ雲岡石窟を開いた曇曜の通楽寺にちなむ寺号にはかならない。もとの通楽寺の所在地についてはさておくとしても、第二〇洞前から白磁碗を主とする遼金代の日常雑器が多く出土していることから、「通楽館」には多数の僧侶が生活していたことがうかがえる。北魏代の僧院は台上にあったのたいして、遼金代には石窟前に僧院があったのである。

「がらくた」のような瓦や土器片を整理することによって、以上のような北魏から遼金代にいたる雲岡石窟の変遷が明らかにできた。いま「雲岡石窟」遺物篇を編集しているが、その公刊のあかつきには「通楽館置」壺をはじめとする遼金代の陶磁器も分館の廊下に陳列したいと考えている。

作られるべきものとしての共同性

森本淳生

人文研の助手に採用されてから、はやいもので、今年で九年目をむかえた。九六年九月の着任直後は右も左も分からず、「共同研究」の何たるかもおぼろげなまま、宇佐美齊先生主催の研究班に参加させていただいた。当時、宇佐美班は「象徴主義」に関する報告書をまとめる段階であったが、その後、「アヴァンギャルド芸術」と「日仏文化交流」に関するものを含め、都合三つの宇佐美班で勉強する機会を得た。

振り返ってみると、人文研に来たことで、私の研究者としての方向性はかなり変化したように思う。人文研は狭義の専門家におさまることを許さないからである。宇佐美班は仏文系の研究者を中心とするものではあったが、「アヴァンギャルド芸術」班の際は、対象の国際性を鑑みて、ドイツ、ロシア、中国などの専門家にも参加いただいたし、「日仏文化交流」班でも美術や音楽を専門にする方々の協力を得て、学際的に研究が進められてきた。このような場では、専門を同じ

くする者の間でのみ通じる言葉で話すことはできない。問題の普遍性を説得的な言葉で明示する努力が必要になってくる。

逆に、発表を聞いて生産的な反応をすることも決して容易ではない。現在進行中の「日仏文化交流」班でも、洋学の展開、フランス近代詩やフランス音楽の受容といった歴史的俯瞰にならんで、岩野泡鳴、九鬼周三、木下杢太郎、林達夫などの個別的調査から宝塚の研究まで、フランスに眼を転じれば、ピエール・ロチ、エミール・ガレ、ブルーストからマルローまで、眩暈するほど話題は多様である。

発表者になるにせよ、聞き手にまわるにせよ、こうした異質な研究者の集う場で話をするに際しては、つねに身を開いていることが要求される。「普遍性」とはあらかじめ存在するものではなく、作られるものだ。自分の言葉を相手に届くように形成するとともに、相手の話の中にある自分との接点を敏感に見いだし、それを伝えていくこと、「共同性」というものがあるとすれば、それはこうした相互作業からのみ生まれてくるはずである。

もちろん、このようなことを私がきちんと実践できただなどと言うつもりはない。それでも昨今の研究をめぐる状況の激変を見るにつけ、もう一度これまでの

生活空間の伝統的要素を 腑分けするために

田中 淡

「共同研究」のあり方を振り返り、その良質な部分を新たに育む必要があるように思われる。制度的にも、個人個人の時間的余裕から言っても、これまでのような人文研の共同研究は難しくなってくるかもしれない。科研費やCOEによる共同研究が常態化するなかでは、それらとの差異化を図ることも急務だろう。

しかし、予算を投下しさえすれば研究者のネットワークが構築できるはずだという、昨今のお手軽な政策に右往左往させられることなく、「共同性」は時間をかけてしか作り出せないものだという人文研のそもそものスタンスをもう一度確認すべき時に来ているのではないだろうか。振り返ってみれば、人文研の研究班に参加することを通じて、私は研究者にとつて最も重要なそうした「姿勢」を学んだのではないかと思う。

かつて中国の士大夫たちはどのような住まいに暮らし、日常どんな衣服を纏い、食事は何を主食・副食としてどういう風に料理して摂っていたのか、また接客の際には主人と客の座席の序列にどういう慣行があったのか、あるいはなかったのか。こうした、ごく普通の習俗について、私たちはあまりにも疎い。私自身が前から抱いていた不満足感あるいは解消できるかも知れないという想いから発し、二年間の時限つきで、一昨年四月から「中国の生活空間と造形」と題する研究班を試験的に組織した。

生活空間とは、一般には皇帝の宮殿や貴族の住まい、庭園、あるいは都市、陵墓、宗教建築などの類を意味するが、この場合はそれと直接かかわる割烹飲食、被服意匠、室内装飾といった多様な要素全般を想定して、中国の伝統文化に固有の特質を探ってみようという試みである。短い研究期間を措定したのは、主題そのもの

のとしては新鮮で発展性が期待できる反面、共同研究の方向が見えぬまま空中分解しかねないという危惧が否めなかったからである。

第一に、歴大な文献史料を擁する中国史のなかにあつて、日常生活に直接関わる史料は、格別の記録対象とはならないため極度に乏しく、歴史上の実像を知るのに障碍となり得る。次に、現実的な理由として、中国学としては異様なまでに、この領域の専門研究者が著しく少ないこと、である。要するに無謀な試みであることは百も承知。そこで、近年進境著しい関連分野の若手研究者たちを班員に加える一方、周辺領域、つまり琉球・朝鮮・東南アジア・島嶼部および日本古代の研究者たちに参加を呼びかけ、中国文学・哲学の専門家にも協力を求めて、ともかく始めてみた。

まだまだ手探り状態にはちがいないのだけれども、すでに二、三の特定テーマについては展望が見えてきた。具体例をあげると、都市計画における漢族的と異民族的の要素の対照、魏晋南北朝の伝統を引く造園意匠のファクター、仏寺建築装飾の原型と変容、などである。あるいは、少数民族にみられる古代漢族文化の遺制、平面配置と儀礼の連関のようなテーマも今後研究の展開が望めそうだ。ほかにも、たとえば、水上居住民の生活習俗、室内家具配置の位序、室内装飾の紡

織技術、等等、ユニークな専門の班員を擁するのは何といつても我が班の強み。序走期間の手応えを引き継いで、この四月から新たに共同研究「伝統中国の生活空間」（予定期間五年）を立ち上げることにした。

共同研究を変えよう

竹沢 泰子

共同研究のあり方については、同世代の同僚たちとしばしば日の明るときも暗いときも議論してきた。そもそも数年前、確か将来検討委員会なるものが存在して、その委員だかを務めた記憶がある。あの場で幾度も会議を開いた上で達した最終提案は、いつか教授会で報告されたが、その直後何か大きな波が怒涛のように押し寄せて、すっかりみんなの記憶から吹っ飛んでしまったようだ。

そのときの委員たちのコンセンサスや最近盛り上がっている同僚の間での議論のなかからいくつかを私なおり、互いのコミュニケーションが不足しがちである現状に、風穴を開けるといふ趣旨である。さてこれらに追加して、予算配分について一言。人文研では、「共同研究」が印籠のようにさまざまな議論で登場するにもかかわらず、予算配分は年間七万円に過ぎない。それに加えて、申請すれば、ゲストスピーカーの旅費が一人分歳出される。共同研究を近畿レベルにとどめることなく全国レベルでフロンティア的研究として進めていくのであれば、外国からとは言わなくとも、せめて国内のゲストスピーカーを地域的制限なくより多く招いて刺激を得たいところである。そのためには最低ゲスト招聘のための旅費配分を増やす必要があるのではないだろうか。また所内のスタッフが多岐にわたる活動をして社会発信をしようとするにも、先立つものがなければきわめて困難である。大きな国際シンポであれば、それなりの機関に申請して助成金を獲得するという手もあるが、そこまでの規模でなくとも何かを企画して発信したいというときに、予算がなく不自由だというのが現状のようである。

年度末に予算が消化しきれず、時として必ずしも必要でない備品が巨額を投じて購入されるのを見ると、（年度繰越ができない現状では会計のご苦労を考えれば仕方がないこととは了解しているが、）何とかなら

りのアレンジによってこの機会に書き留めてみようと思う。

第一に、教授の研究班主催義務を廃止すること。その理由は、研究会の数が現状ではあまりに多すぎる、また、義務であるがゆえに、意欲的な共同研究が行われにくくなる場合があるからである。私自身助教教授であるからこそ、楽しく主催しているけれども、これが義務となると、途端にいささか憂鬱に思えてくるのではないかと危惧している。先日神戸のあるNGO活動家が口にした言葉と妙に重なってくる。「ボランティアは頼まれなくてもやる。頼まれたらやらない。」ボランティアと教授職を比較するつもりはないが、共同研究で望まれているのは、形式上の主催や報告書作成ではなく、むしろたとえ生涯のトータル回数が多少減っても、社会にインパクトの強い発信を行うことではないだろうか。

第二に、将来検討委員会の中で木曜セミナーとして提案したものであるが、最近同種の議論が再浮上している。つまり所内のできればスタッフ全員が出席して、共通の年次テーマのようなものに即して、定期的にセミナーを開催するというものである。最近の議論では、なるべく多くの人が参加できるように大きなテーマを設定することにより、一部共同研究が峭壺的になつて

ないものかと思ってしまう。この件、企画委員会で提言したことがあるが、今後より多くの所内外の方々と率直に意見交換ができれば幸いである。

宝 湯

浅 原 達 郎

一九六〇年代に全盛だった商売に「貸本屋」がある。たとえばその当時の子供としての立場からいうと、漫画雑誌（当時は月刊が主流だった）を買って読むのは裕福な家庭の子であって、多くは貸本屋で一日なんぼで借りて読んだものである。わたしの母方の祖父は、むかし西日本の田舎町で銭湯を営んでおり、銭湯に附設したかたちで始めた小さな貸本屋もやっていた。銭湯のお客が行き帰りのついでに貸本屋を利用するのが常だったのである。まもなく銭湯も貸本屋もどちらも流行らなくなり、早くに廃業して、祖父もまたこの世のひとではないが、子供のころの、番台にすわったと

きのいごちのよさとか、貸本屋で漫画のページをくるときにわくわくした気持ちとかは、おほるげに記憶のなかにある。貸本屋が廃れた理由は、大人も子供も本や雑誌を自分で買って読むようになったからだというのは、だれにでもわかる。ただ、漫画雑誌に限らず、月刊誌から週刊誌への移行が、そこに重なっているという印象がある。出版者側の状況の変化もそこに無関係ではないのだろう。

「中国古代の基礎史料」班では、班員の多くが学生であり、経済的に必ずしも余裕があるとは限らないので、研究班に与えられた予算で、初心者が読むにふさわしい書物を購入し、班員に貸し出すシステムを作ってみた。わたしや年長の班員がポケットマネーで購入した書物も、若干はそこにふくまれる。このシステムを祖父の銭湯の屋号を借用して「宝湯」と呼ぶことにしたのは、週に一度の研究会の行き帰りのついでに利用してもらおうというねらいである。料金はとらないが、研究班附属の「貸本屋」ということにしてあるのは、中国語の勉強にもなるということ、わたしが読み終わった推理小説なども紛れ込ませてあるから、もちろんそれらはわたしの私物を提供したものである。研究班の予算で購入する書物としては、高価な研究書は本物の図書館にまかせて、廉価な良質の啓蒙書の中

心を選んでいる。たとえば李零氏の『簡帛古書与學術源流』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇四年四月）などは、複数冊購入して、班員ひとりひとりに行きわたるように準備した。

さてそんな「宝湯」の悩みのたねは、かんじんの客足がさっぱりだということにある。番台のおやじの昔話はほどほどにして、若いひとたちが利用するための工夫をもっとこらさねばならないだろう。品揃えもすこしは充実させなければならぬし、内容を簡単に参照できるサービスも有用だろう。しかしあまり繁昌すると、こんどはおやじひとりの手にあまることになるし、スペースも研究室の片隅というわけにはいかないから、そうならないように、あくまで「宝湯」の名にふさわしい規模に収めておくことも、わたしには重要である。だがその心配はおそらく無用なのである。



不惑の惑惑

田 辺 明 生

去年の十月から人文科学研究所のお仲間に加えていただいた。四十歳不惑での異動であり、「これを機会になおいっそう精進いたします」と高らかに宣言したところである。だけどすぐに心の中では「そんなこと言っちゃって、何に、どうやって」とすぐ惑ってしまふのが我ながら情けない。あわてて言い訳すると、やる気がないわけでは決してない。やりたいこと、興味のあることが多すぎて、「惑うことなくこの道を進んでいきます。ええ、これが私の仕事です」といえるような腹の据わった大人の気分にはまだなれないのである。

こんな四十歳になるはずではもちろんなかった。人間的にも学問的にももつと円熟している予定だったのだが、どうも昨今の時間の流れは、孔子様のころよりずっと速いらしい(などとうそぶく図々しさだけは身につけてしまいました。すみません。)

私の専門は人類学ということにしてもらっているが、そもそも法学部から大学院は文化人類学にうつったの

も、人類学ならどんなことでも研究させてくれそうだというきわめて畏れ多い理由がひとつにあった。私は気が多いというのか、本人としては移り気であるというよりも情緒の量が多いからだと思いたいところだが、いずれにせよ、何に対してもすぐに感情移入してしまふことがしばしばだ。

オペラ歌手のコンサートに行けば声楽をやっておけばよかったと思ひ、河井寛次郎旧邸を訪ねると陶芸生活にあこがれる。琵琶湖疏水記念館で田辺朔郎の偉業に触れれば、同姓でありながらあまりに不甲斐ない自分に、社会のために何かできることはないかと反省する。果てはワールドカップ予選の日本代表戦をみながら、テレビに向かって「俺を出させろ」と叫んでしまふ始末である。

研究においても、さまざまな領域での刺激的な仕事に触れるたびに、そのトピックや考えかたについてより深く知りたいという抑えきれないような気持ちをもつ。自分のやっていることをとりあえずまとめてからと自らの心に手綱をつけて何とか制御しているらしいのである。

人文研に入れていただいて、私の畏敬する先生のお一人から、「共同研究を楽しんでください」というお言葉をいただいた。これまではまだいくつかの共同研

所のうち・そと

究会にしか出られていないが、いずれも領域横断的な知的刺激にあふれるもので、これからこうした場合で勉強させていただけるととても楽しみにしている。人文研でさまざまなお教えや刺激をいただくなかで、これが自分の仕事だと納得できるような道をいつかつくりあげていくことができたならと夢想して、これからの研究生活に大いに惑惑している。

「親日派」と「蛙の目玉」

李 昇 燁

まずは、新米研究者時代のトラウマ的な話から。母国で修士論文を書くとき、私は「親日派」のH氏について調査していた。氏は戦時下の植民地朝鮮でいわゆる「内鮮一体論」の代表者ともいべき存在で、知る人ぞ知る悪名高き人物であった。氏は戦後、日本に逃走したという噂だったが、氏の離婚した元奥さんと息子さんがソウルに住んでいることがわかった。多少「裏の手口」を使って住所を調べ、すぐH氏について

話を聞きたいという内容の手紙を出した。しかし、何ヶ月たっても返事はなかった。結局、いきなり自宅を訪ねてみることにした。そこはソウル市外郭のスラム地区だった。私が訪ねたときには、もはや氏の家族はどこかに転居した後であった。「私が手紙なんかを出したから、思い出さたくない過去のことなんか言い出したから、どこかに引越して逃げちゃったのか。ああ、悪いことをしちゃったな」という思いがして、何となく気が重かった。その後、再び転居先を探り出すことができたのだが、今度は到底連絡なんかする気にはなれなかった。いま韓国では、国家が植民地時代の「反民族行為者」を調査する問題をめぐって紛議が起こっている模様だが、それを見るたびにあのときの苦い記憶が心の隅で思い出される。

近現代の歴史を専門とする研究者として現実に対しては如何なるスタンスをとるべきか、という問題に関しては、かつて恩師よりのご教示があり、それに全く共感している所である。すなわち、近代の政治史を研究する視角が、「蛙の目玉の電動作用に対する紫外光線の影響について」といった研究をすることと同等なるものとしてできないわけではないとの話(永井和『近代日本の軍部と政治』の付録。現実との距離に関していつも負担と同時にコンプレックスを感じている

者としては、この一句はまさに救援の福音に違いない。最近の数年間は、現実にもイデオロギーにも関心を持たず、「蛙の目玉」的研究者の道を着実に歩んできた日々だったが、先日、突然現実の磁場に巻き込まれてしまう出来事があった。韓国のテレビ局より「親日派」の嫌疑が噂される某大物独立運動家についてインタビューを求めてきたのである。調査してみたところ、某氏にかかっている嫌疑点はほとんど事実無根だったので、インタビューでは事実通り、「蛙の目玉」的な答えをしたが、問題はこれで終らない。テレビの番組というものは、論文とは違って、私の言葉はある種の「意図」によって編集・加工されるわけなのだ。結果的には、韓国社会における「親日派」をめぐって政治勢力や言論媒体が形成している政治的磁場の中に足を踏み込んでしまったことになりかねない。ただ「蛙の目玉」路線を歩みたいという私の素朴な念願も、現実の強力な磁場の前では無力かも知れない。恩師の薫陶を全うするには、未だ修業が足りないようだ。

犬好きな日本の私

山崎 岳

僕は日曜日になると、今出川の数あるコーヒー屋の一軒を選んで午後半日をつぶすことがよくある。学生時代には喫茶店とは女子供が行くところと思ってあえて遠ざけてきたのだが、最近はそのような考え方が男性中心の差別的偏見につながるものだと知らされ深く反省、結果、いちゃつくカプルの隣のテーブルで都会人らしく読書に耽るのも平気になった。もちろんランチセットのコーヒー一杯で三四時間粘るので、店員からよい顔をされないことはわかっているが、どうせテーブルは空いているのだし、埋めておいた方が店もにぎやかに見えるだろうという僕なりの親切心も手伝って、店員の迷惑のごときはあえて気にしないようにつとめている。そんな優雅な日曜の午後、一つのできごとがあった。よい機会なので、ここに紹介しよう。

その日も僕はいつものように、数あるコーヒー屋の一軒を選んだ。店舗は小さいが、いかにも洋風な装いで、周りの店と比べても一等群を抜いてこじやれてい

る。ガラス戸に映った寝ぐせを直しながらメニューを確認、引き戸を開けて一歩踏み込むと、何か黒いものが僕の足にまとわりついた。犬だ！真つ黒い大きな犬が赤い舌を出したり引つ込めたりしながら、僕の足のおいを嗅ぎ回っている。びっくりして飛び上がりそうになるのを懸命にこらえ、店内を見渡すと、やんぬるかな、その黒犬と通路を挟んだ隣のテーブルが空いているばかりだった。もともと犬は嫌いではない。人間と違って犬は裏切らない、とは孤独な隠者の言い分だが、人間と違ってからかえばからかうほどなついてくれるところも好きだ。店員にカレーを注文し、空きテーブルの、犬がよく見える位置を選んで座った。確かに高そうな立派な犬だ。青黒い毛並みは底光りして金属的なつややかさすら帯び、平安朝の女官の黒髪もかくやと思われるほど美しい。雌雄の別は判らないものの、張りつめた体軀は鎌倉彫刻の力士像を思い起こさせる。いやいや、休日のコーヒー屋につれてくるくらいだから、おそらくは外国産の犬だろう。フランスダースの犬はこんなに黒くはなからうが、ルーベンスの描く馬の毛並みはちょうどこんな具合の色つやだったかも…。

ところがこの犬がとんだバトラッシュであった。何よりもひとところに落ち着いているということをしな

い。ただでさえ狭い店の中で、飼い主の足下を行ったり来たり、店員が皿を上げ下げするたびに、盆に向かつて鼻を伸ばす。時々何かをふるい落とすように身体をブルブルとさせるから、すぐ隣でカレーを食べている僕としては、目に見えないノミか何かかピョンピョン跳んでくるようで気味が悪いつらな。おまけに店の前を犬という犬が通るたびに、ワンワンワンと大音声を張り上げてガラス戸に頭をぶつけるので、こちらとしてはもはやカレーどころではない。出て行け！と怒鳴りつけたいところをくくつとこらえ、店内一丸となって飼い主に非難のまなざしを向けるのだが、英国産の犬であれば英語が通じると信じているのか、犬公方は淑女然としてNO、NO！と飼い犬との英会話を試みるばかり、ガラス越しのいがみあいに連戦連勝のドン・キホーテは、ほめられたつもりなのか舌を出して息を弾ませている。三十六計逃げるにしかず、日曜の午後のコーヒーというささやかな楽しみを放棄するのは口惜しいが、お犬さまの引き立て役になるならなおさらだ。そそくさと席を立つ。レジで勘定を払い、店内と比較してよほど清浄に感じられる今出川街頭の空気に胸のすく感覚を覚えつつ店の入り口を後ろ手に閉じるその時まで、犬は僕のズボンの裾にその首筋をこすりつけるのをやめなかった。それからほ

どなくして、僕は風邪をこじらせて一週間仕事を休むはめになった。因果関係を立証するすべはもとよりないが、やり場のない鬱憤を疑わしきに向けるのは人の常、僕は今でもあの犬を恨んでいる。

飼い主にとって、飼い犬はかわいいものだろう。パカな子はどかわい、のたとももあるように、愛玩物としての飼い犬は少し足りないくらいがちょうどいい。時代は「笑い」を求め、個人は癒しに飢えている。テレビのCMではないが、とかく張りつめてゆきがちな日常に、「いてくれる」だけで周囲がなごむ小動物の存在は、無用の大用、無為にして為さざる無しだ。ベット・ロスなどという言葉も流行するほど、人はベットの依存している。しかし、それと同時に、飼い主が日曜の午後、近所のコーヒー屋に飼い犬をともなつて出かけてみたいという、スタイリッシュな欲求に駆られたことも理解できる。足下に蹲る漆黒のビロードと、カップに香り立つコーヒーのぬくもり。ゴージャス・アンド・テイステイ。映画の一シーンか、ファッション雑誌のページか、コーヒーと黒犬との取り合わせは、少なくともウサギと月見団子などよりはよほどシックで現代的だ。あの日、今出川の数あるコーヒー屋の一軒で繰り広げられた光景は、それら二つの相矛盾する嗜好が当然ながら落ち合った悲喜劇であった。引

き裂かれた実感と、スタイルと。情愛と、社会性と。安らぎと、虚栄と。モード専制の消費社会で、犬が鳴いている、人も泣いている。

ノスタルジア吉田

倉島 哲

本館の助手になってから、吉田キャンパスと地理的に近くなった。それまでは、時計台のある本部キャンパスの中央少し北寄りにある文学部の建物を根城にしていたのだから、近くなったといってもせいぜい数百メートルのことである。しかし、これだけの違いで、二〇歳そこそこのとき文学部に専攻分属して以来遠ざかっていた吉田キャンパスに、時折足を向けるようになった。

ピラと落書きでいっぱいA号館のあった所に立っていたのは、大きなアーチを備えたきれいな建物だった。だが裏手に回ると、記憶にあったとおりの閑散とした中庭を、灰色の建物が見下ろしていた。正面の

アーチが、書き割りじみた文字通りのファサードだと知っておかしく思えたと同時に、隠れていた懐かしい光景に安心した。壁面の灰色は、学部二回生のときにベンチに座ってドイツ語の授業を待っていたときに見上げた灰色と同じだった。

当時はやたらと空きコマがあった。もつとも、最初から空いていたわけではない。手帳には、自分が興味を持ってそうな授業を念入りに選んで作成した綿密な時間割表がはさんであった。だが、五月の連休が明けて、授業を一度休み二度休みするうちに、前回は重要なテストがあったのだ、一定以上の出席がないとレポート提出資格がないだの授業に出ていた友人から聞かされる。単位が取れないとわかった授業にはそれ以上出ても仕方がないので、時間割表に×をつける。そうして自然と空きコマが増えてゆく。

出席しない授業が増えようと、授業で知り合った友達とも疎遠になり、たまたま出会ったときに声を掛けあうだけの友人が増える。この程度のつきあひしかない友人に、試験前に頼み込んでノートをコピーさせてもらっている自分がいやだった。高校までの友人は、授業や登下校のときに共に過ごす時間が長かったために自然発生的に仲良くなった友人であったのに対し、大学の友人は利害のための友人だった。だが、振り返れ

ば、高校時代に特定の人々と長時間共に過ごしたのは、学校という制度の強制があつてこそではなかったか。吉田キャンパスの灰色の壁を眺めながら、私は人間関係の底に本来的に横たわる孤独というものはじめて知った。

そんななか、あるとき一人で大文字山に登ると山頂にクラスメートの山崎がいた。意気投合したのもつかのままで、彼は三回生のときに留学のため中国奥地に旅立っていった。帰国予定は二年後。その頃には、我々はずでに就職して大学を離れており、今後彼に会うこともあるまいと私は共通の友人と話したことを覚えている。そんな彼と勤務先を同じくすることができるのは全く幸運であった。

最後の野帳

高井 たかね

中国の生活空間と造形班では、研究期間最後の発表者として、日仏会館のフランソワーズ・サバン先生を

お招きして講演していただくことになった。講演タイトルは「中国古代の麵食文化史」である。このタイトルを聞き、そういえばずいぶん前に自分も中国の粉食について発表したことを思い出した。サバン先生の研究とはテーマが類似するというだけで較べようもないのはいうまでもないが、その内容はさておくとして、この発表が、私が今まで愛用してきたフィールドノートを使い始めるきっかけであった。

修士課程に進学したその年、中国民族建築学のA先生の講義で、受講者それぞれが発表することになった。テーマは何でもよし。たまたまその直前に初めての中国旅行から帰ったばかりだった私は、旅行中に食べていたく気に入った、中国の粉もの食品をテーマに発表することにしたのである。そのとき、記録としてノートにつけていた日記をコピーして参考資料にと配ったのだが、これが間違いのもだった。元来貧乏性で物を捨てられない質の私が旅行に持参したのは、小学生時代の使いさしノート、しかも「びえつくしよん」という文字とともにクシャミをする女の子のイラスト入りのものだったからだ。いまさら言い訳する気はないが、五人という少人数で和気藹々とやってきた気楽さからか、発表内容がたいしたことないのだから、ここは生々しさ(?)で勝負とばかりに、何を血迷った

かこんなノートに書き付けた日記を出してしまつたのである。その後、当然のことながら、A先生からは事あるごとに「びえつくしよん」を持ち出され、「大学の授業でこんなもの出しやがって」と何度もからかわれたことはいまでもない。

しかし、ありがたいことに、その場で先生からきついお叱りは受けなかった。しかも最後の講義でだったか、「おい、これでスケッチくらいしてこい!」と、ガバツと一たばの手帳を差し出されたのである。ハードカバーの立派な手帳で、先生がご自身の調査用にと特注で作られたものだそう。あんな発表をしていながら私もほとんど厚かましい人間だが、ありがたく全冊頂戴した。これが、まともな「フィールドノート」なるものを知った最初である。フィールドワークの訓練など積んでいない私にとって、この野帳はあまりにすぎた品だったが、それからは旅行のたびにこの手帳を持っていくようになり、また留学にも持参していった。何回かは別の手帳に浮気したことがあったものの、その後、続けて使わせてもらっている。

あの時いただいた野帳も、今度の中国行きで最後の一冊となった。この一件に限らず、自分は能力の割になぜか周囲からの助けに恵まれ、幸運な存在だと日頃から感じている。だが、この最後の一冊にたどり着く

までの数年を振り返ってみると、果たして自分はどれほどそのありがたさを認識しているのか、また、それに見合っただけのことを自ら積み重ねてきたかどうかと自問せざるをえない。逆にふてぶてしく不義理をはたらいてきてはいないだろうか。旅の支度を調えながら、ふとこんなことを考えた。最後の野帳、無駄にせぬようにしたい。



書いたもの一覽

(氏名五十音順)

●は単行本)

浅原 達郎

曰古—中国古代の基礎史料— 曰古 一号 六月
漢初の暦法 曰古 二号 九月

池田 巧

中国語の方言 東方中国語辞典 四月
広東語の各項目&エッセイ：飲茶に行きませんか？ 石井米雄・千野栄一編『世界のことは・出会いの表現辞典』 三省堂 六月
羊男の話す英語 人文 五十一号 六月

The Mu-nya language and the Tangut language: Some problems in their comparison. Ying-chin LIN et al. (eds.) *Studies on Sino-Tibetan Languages*. Academia Sinica. 十二月

石川 禎浩

中国共産党員数、構成概要(中共一大—六大) 科研費成果報告書『中国近代社会の変容についての数量データと基礎的資料の収集と分析』 四月
中共党史関係定期刊行物・雑誌書誌 科研費成果報告書『中国近代社会の変容についての数量データと基礎的資料の収集と分析』 四月

井波 陵一

●翻訳：丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第三卷(共訳) 岩波書店 五月
●翻訳：丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第四卷(共訳) 岩波書店 七月
思いがけぬ再会 漢字と情報 九号 十月
●翻訳：丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第五卷(共訳) 岩波書店 十一月

岩井 茂樹

China's Frontier Society in the Sixteenth and Seventeenth Centuries. ACTA ASIATICA. No. 88. 一月
徐葆光—琉球を訪れた康熙帝の使節 木田知生・檀上寛編『中国人物列伝』 恒星出版 一月
明代中国の礼制覇権主義と東アジアの秩序 東洋文化 八五号 三月
比較都市社会史の行方—報告・討論全体を通じて— 井上徹・塚田孝編『東アジア近世都市における社会的結合』 清文堂出版 三月
解説：定宜庄『清代北京城内の八旗鯨夫』 同前書 三月

●翻訳：丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』第三・四・五卷(共訳) 岩波書店 五・七・十一月
中国共産党第二回大会について—党史上の史実は如何に記述されてきたか 東洋史研究 六三卷一号 六月

Liang Qichao, the Field of Geography in Meiji Japan and Geographical Determinism. Joshua FOGEL (ed.) *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China*. Institute of Eastern Studies, University of California. 七月
趙紫陽氏の死 京都新聞 一月二十四日

稲葉 穂
Nay Qala, Wujistan and the Khalaj. Giovanni VERAR. DI and Elio PAPPARATTI (eds.) *Buddhist Caves of Jaghuri and Qarabagh-e Ghazni, Afghanistan*. ISIAO. ROME. 五月
シルクロードと中央アジア 間野英二・堀川徹編『中央アジアの歴史・社会・文化』 放送大学教育振興会 九月
アリア時代の中央アジアの文化 間野英二・堀川徹編『中央アジアの歴史・社会・文化』 放送大学教育振興会 九月

ウィツテルン クリステイアン
禅とコンピュータ(四) 禅文化 一九二号 四月
翻訳：Sekkei Harada (原田雪溪) Zen. Erwachen zum wahren Selbst. Krikkeitz Verlag 五月
唐代ナリッジベースに向かつて 漢字文献情報処理研究 五号 十月
宇佐美 齊
作家の恋文を読む①—⑫ NHKラジオ・フランス語講座 四月—三月
書評：杉本秀太郎著『青い兔』 京都新聞 七月二十五日
白熱の現在を生きる詩人ランボー 京都新聞 八月十九日
紫陽花の消長—春日井建の死を悼む— 現代詩手帖 特集版 八月号
立原道造生誕九十年に寄せて 立原道造記念館館報 九月二十九日

書評：杉下元明著『江戸漢詩』 京都新聞 十月十七日
フランス詩の磁場 中村稔・宇佐美斉・佐々木幹郎編『新編中原中也全集』別巻「研究篇」 角川書店 十一月
エスポジト モニカ
The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty. John Lagerwey (ed.) *Religion and Chinese Society: The Transformation of a Field*, vol. 2, 621-698. Paris: Ecole française d'Extreme-Orient and

の二十世紀——文化の客体化 『文化人類学事典』

- 弘文堂 一二月
- 距離感——民俗写真家・芳賀日出男の軌跡と方法——人文
- 学報 九一号 一二月
- 書評・写真を読む力(佐野真一)『宮本常一の写真を読む 失われた昭和』須藤功編『写真でつづる宮本常一』季刊
- 東北学 二二号 二月

金 文京

- 書評・絶代佳人、一往学深 竹村則行著『楊貴妃文学史研究』東方 二八一号 七月
- 元曲の女性像 中国21 二〇号 風媒社 八月
- 「根底」の根底 TONGXUE 二八号 同学社 九月
- 三国志演義 石昌渝編『中国古代小説総目—白話卷』山西教育出版社 九月
- 複式夢幻能と中国の元曲 観世 十二月号 十二月
- 元曲中の張別古 芸文研究 八七号 慶応義塾大学 十二月
- 邯鄲夢記校注(共著) 上海古籍出版社 十二月
- 三国志の世界 講談社 一月

倉島 哲

身体資源の把握をめぐって 科研費成果報告書『資源の分配と共有に関する人類学的総合領域の構築』 八月

小関 隆

- プリムローズの記憶…コメモレイトされるドイツレイリ 人文学報 八九号 八月(奥付は〇三年十二月刊)
- 書評・谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』西洋史学 一二五号 十二月
- 大文字 人文 五一号 六月

小牧 幸代

- インド・ムスリムのカタログ 英領インド期のセンサスにおけるカースト・トライブ・人種の諸相 竹沢泰子編『「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究(第一部)』科研費成果報告書 五月
- 「赦しの夜」の日の出来事 北インド・ムスリム社会の死者儀礼 月刊みんぱく 七月号 七月
- 新刊紹介・子島進著『イスラームと開発 カラーコラムにおけるイスマール派の変容』文化人類学(旧民族学研究) 六九卷二号 九月
- 北インド・ムスリム社会のサイヤド カーストとイスラームのはざままで 赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編『イスラーム地域研究叢書7 イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会 一月
- インドのイスラーム 『海外の宗教事情に関する調査報告書』文化庁 三月
- 現代パキスタンの宗教事情 『海外の宗教事情に関する調査報告書』文化庁 三月

Islam and the Self-Representation of Punjabi Muslims in Pakistan: Case Study of the Exhibition of Holy Relics in the Badshahi Masjid. *The Journal of Sophia Asian Studies*. No. 22. Institute of Asian Cultures, Sophia University. 三月

小南 一郎

- 論射的儀礼化過程——以辟雍儀礼を中心(秦小麗訳) 『西周文化論集』 朝華出版社 〇四年一月
- 唐臨的仏教信仰和他的『冥報記』 劉楚華編『唐代文学与宗教』 中華書局 五月
- 中国の洪水伝説 『世界の洪水神話』 勉誠社 十二月
- The ruling system in Western Zhou and Idea of Ming (合). ZINBUN 37 三月
- 目連伝承の近世的展開 科研費成果報告書『宝巻の研究——宗教文芸としての視点から』 三月
- 中国文明の形成(編著) 朋友書店 三月
- 西周王朝の成周経営 『中国文明の形成』 朋友書店 三月

坂本 優一郎

- 書評・山下範久『世界システム論で読む日本』 『世界史のしおり』 帝国書院 一月
- 空間としての投資社会 川北稔・藤川隆男編『空間のイギリ』 山川出版社 二月

佐野 誠子

- 民間祠廟記録の形成 小南一郎編『中国文明の形成』 朋友書店 三月
- 大海に溺れて 人文 五一号 六月
- 中央研究院歴史語言研究所訪問記 漢字と情報 九号 十月

曾布川 寛

- 「神話と祭祀の国」湖南・楚の出土文物 西林昭一編『湖南省出土古代文物展 古代中国の文字と至宝』 毎日書道会 九月
- 六朝帝陵——以石獸和磚画为中心(傅江訳) 南京出版社 九月
- 橋本氏収蔵中国書畫録(共編) 東方学資料叢刊十三册 京大 三月
- 大人文研附属漢字情報研究センター
- 高木 博志
- 『史料翻刻・藤波言忠 京都御所取調書 一九二四年(宮内庁書陵部所蔵)——明治維新と京都文化の変容』 科研費成果報告書 三月
- 川西町史(共著、明治維新担当) 川西町史編纂委員会 三月

- 日本美術史／朝鮮美術史の成立 科研費成果報告書『植民地支配の制度・機構・政策に関する総合的研究』 五月
- 明治維新と賀茂祭 京都新聞 五月十三日、二十日
- 世界遺産と皇室の文化財 科研費成果報告書『文化政策・伝

統文化産業とフォークロリズム：『民俗文化』活用と地域
おこしの諸問題 七月

近代の陵墓問題と継体天皇陵 仏教大学総合研究所紀要別冊
近代国家と民衆統合の研究 八月

積み重ねられた古都イメージ 京都新聞 十二月十六日
近代天皇制と賤・穢 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問
う』 人文書院 二月

「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの 歴史評論 六五九号 三月
辞書項目：陵墓／即位式と大嘗祭／祝祭日／一世一元制
『天皇・皇室辞典』 岩波書店 三月

高階 絵里加

西洋美術における異邦人表現の伝統——（東方三博士の礼拝）
図像をめぐる—— 科研費成果報告書『人種』の概念
と実在性をめぐる学際的基礎研究（第一部） 五月
フランスへ渡った日本——川村清雄の『建国』について——
人文学報 八九号 八月（奥付は〇三年十二月刊）

明治前期の渡欧画家たち 画家が描いたヨーロッパ
美術年鑑社 十月
生きる喜び 光の交響詩 奈良県立美術館「モネ展」

陶酔と倦怠 色と形に サントリーミュージアム天保山
「ロートレック賛歌」
日本経済新聞（夕刊） 十二月二十日

日本の美意識とも共鳴 「ラリック」展

日本経済新聞（夕刊） 三月十七日
日本絵画の本質問う「岡倉天心と日本美術院」展
日本経済新聞（夕刊） 三月三十一日

高田 時雄

明治四十三年（一九一〇）京都文科大學清國派遣員北京訪書
始末 敦煌吐魯番研究 七卷 一月
バルセロナ訪書略記 漢字と文化 三三号 六月
書評：榮新江『中古中國與外來文明』 東洋史研究 六三卷
一号 六月

近代日本之漢籍收藏與編目 『二〇〇四年古籍學術研討會論
文集』 輔仁大學出版 七月

The Chinese Language in Turfan with a Special Focus on
the Qieyun Fragments. Desmond Durkin-Meisterernst et
al. (eds.) *Turfan Revisited — The First Century of Re-
search into the Arts and Culture of the Silk Road.*
Dietrich Reimer Verlag, Berlin. 七月

莫高窟北區石窟發現《排字韻》簡記 敦煌學 第二五輯（潘
重規先生逝世週年紀念專輯） 九月
明末官話調値小考 語言學論叢 二九輯 十月
翻訳：湯志鈞「章太炎『佛學手稿』」 漢字と情報 九号 十月

竹沢 泰子

●日系アメリカ人リターダーシップ・シンポジウム「アジア系ア
メリカ人の多様性…連帯に向けて」 国際交流基金CGP
公開シンポジウム報告書 十二月

人種とエスニシティ 小松和彦他編『文化人類学文献事典』
弘文堂 十二月

書評：グールド『人間の測りまちがい』／ベネディクト『人
種主義』／グレイザー＆モイニハン『人種のあるつばを越え
て』／竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ』 小松和
彦他編『文化人類学文献事典』 弘文堂 十二月

●人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて
人文書院 二月

総論：人種概念の包括的理解に向けて 竹沢泰子編『人種概
念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』
人文書院 二月

検証テーマ：外国人県民支援のしくみづくりと地域の国際化
の推進 復興十年総括検証・提言事業 最終報告 三月

武田 時昌

東アジア自然学における健康思想 同志社大学ヒューマンセ
キュリティ研究センター年報 一号 〇四年三月
王充の性命論と科学知識 『坂出祥伸先生退休記念論集』中
国思想における身体・自然・信仰 東方書店 八月
インターネット時代の人文学の新しい技術 漢字と文化 四
号 二月

田中 淡

中国園林史研究盲点の突破 『第二回被殖民都市與建築——
本土文化與殖民文化——国際学術研討会』
中央研究院台湾史研究所 十一月

●アジアの軍隊の歴史・人類学的研究 社会・文化的文脈にお
ける軍隊 人文学報 九〇号 四月

軍隊の文化人類学的研究への視角 人文学報 九〇号 四月
軍隊と宗教 米軍におけるチャブレン 人文学報 九〇号 四月

Defying Blessings of the Goddess and the Community:
Disputes over sati (Widow Burning) in Contemporary
India. Shoun HINO and Toshino WADA (eds.) *Three
Mountains and Seven Rivers: Prof. Masashi Tachika-
ra's Felicitation Volume*

Motilal Banarsidass, (Delhi) 四月
米軍における人種政策 一般社会との関係をめぐって 竹沢
泰子編『人種』の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究』
科研費成果報告書 五月

沖繩のパキスタン・カレー 在日米軍の文化人類学 月刊み
んぱく 二八巻 五月

書評：松園万亀雄編『くらしの文化人類学 4 性の文脈』
文化人類学 六九巻 六月
従軍牧師 越境する聖職者 青弓社編集部編『従軍のポリテ

イクス」

青弓社 七月

宗教による支配・抵抗から主体化へ。スリランカとシンガポールに見るタミル人たちの儀礼経験をめぐって 島蘭進 他編『岩波講座 宗教九 挑戦する宗教』

岩波書店 七月

資源としてのフェティッシュ 総括班(内堀基光代表)編『中間報告 資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築 象徴系と生態系の連関をとおして』 科研費成果報告書 東京外大AA研 八月

今を読み解く 世界秩序と新しい「暴力」 日経新聞 八月一日

祝う 大塚和夫・関一敏編『宗教人類学入門』

産経新聞(夕刊) 十月二八日

●文化人類学文献事典(共編)

弘文堂 十二月

辞典項目・デュモン『ホモ・ヒエラルキクス』/R・ニーダム『構造と感情』/田中雅一編『暴力の文化人類学』/田中雅一『供儀世界の変貌』/M. BLOCH *Ritual History and Power* / G. マーティック『社会構想』/L. H. MORGAN *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family* / Masakazu TANAKA *Patrons, Devotes and Goddesses* / Yuko NISHIMURA *Gender, Kinship and Property Rights* / F. BARTH *Political Leadership among Sweat Pathans* / カースト論/家族制生産様式論

儀礼とイデオロギー/供儀論/交又イトコ婚をめぐる論争

／高地ビルマの構造と歴史/親族と経済/ドラヴィダ型親族名称と婚姻論/パシユトゥーン民族誌/バラモンの地位 『文化人類学文献事典』 弘文堂 十二月

インドの影絵人形 月刊みんぱく編集部編『世界民族モノ図鑑』 明石書店 十二月

●『ジェンダーで学ぶ文化人類学』(共編) 世界思想社 一月
ジェンダーとセクシュアリティの人類学 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 世界思想社 一月

女になる、男になる ジェンダー儀礼 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 世界思想社 一月

コラム・売春婦と主婦/女性兵士とミスター・マム 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 世界思想社 一月
変態する身体 モダン・プリミティヴのゆくえ 山下晋司編 『文化人類学 古典と現代をつなぐ20のモデル』

南アジアにおける宗教事情 文化庁編『海外の宗教事情に関する調査報告書平成17年3月』 文化庁 三月

現代インドにおける宗教事情(共著) 文化庁編『海外の宗教事情に関する調査報告書平成17年3月』 文化庁 三月

田辺 明生

儀礼のなかの歴史/歴史のなかの儀礼——人類学の視点から 歴史の理論と教育 十八号 十月

歴史と人類学 小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公

三編『文化人類学文献辞典』

弘文堂 十二月

谷川 穰

ある史料調査の思ひ出 人文 五一号 六月
釈文・解説:『長州志士の軌跡 幕末維新展』直筆が語る実像』 京都大学附属図書館 十一月

富永 茂樹

精神医学史とシシエル・フーコー 精神医学史研究 八卷二号 十月

書評:安藤隆穂編『フランス革命と公共性』 社会経済史 七〇巻四号 十一月

●理性の使用——ひとはいかにして市民となるのか みずす書房 一月

富谷 至

●*Law and Customs in East Asia—A study of capital punishments.* JSPS Grants-in Aid for Scientific research. 五月

Death penalty—The ancient and Middle Ages of China. *Law and Customs in East Asia—A study of capital punishments.* JSPS Grants-in Aid for Scientific research. 五月

ドイツ・ミュンスター大学より 漢字と文化 三号 六月
翻訳:エノ・ギール『郵』制致——秦漢時代を中心た』 東

洋史研究 六三巻二号

九月

●訳注 中国歴代刑法志(補)

創文社 二月

漢代の「伝」について シルクロード学研究 二二二 二月
調査遺跡の報告:安西/敦煌間に諸遺跡 シルクロード学研究 二二二 二月

よくわかる中国史(連載) 週刊中国悠遊紀行 一〇二七 小学館 九月~三月
中国の歴史(共編著)上 昭和堂 三月

中西 裕樹

●翻訳:北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編『現代中国語総説』(共訳) 三省堂 六月
畚語中の漢字音初探 東方学報 七七册 三月

藤井 正人

●*The Jaininija-Upanisad-Brahmana: A Study of the Earliest Upanisad, Belonging to the Jaininija Samaveda.* University of Helsinki. 十月

藤原 辰史

●ナチス・ドイツの有機農業:「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」 柏書房 二月

船山 徹

The Acceptance of Buddhist Precepts by the Chinese in

真諦三蔵の著作の特徴——中印文化交流の例として(研究例
会発表要旨) 関西大学東西学術研究所々報 七九号 十月

經典の偽作と編輯——『遺教三昧経』と『舍利弗問経』(発表
要旨) 漢字と文化(特集号) 十一月

經典の偽作と編輯——『遺教三昧経』と『舍利弗問経』 京都
大学二世紀COEプログラム成果報告書『中国宗教文獻
研究国際シンポジウム報告書』 十二月

瞑想の実践における分別知の意義——カマラシーラの場合
『神子上恵生教授頌壽記念論集、インド哲学仏教思想論集』
永田文島堂 一月

東アジアにおける仏教と諸宗教(仏教史学会第五四大会シ
ンポジウムの司会) 仏教史学研究 472 一月

古松 崇志

元代カラホト文書解説(2) オアシス地域研究会報 五巻一
号 三月

東モンゴリア遼代契丹遺跡調査の歴史——一九四五年滿洲国
解体まで——『遼文化・慶陵一帯調査報告書』 京都大学
大学院文学研究科 三月

遼慶陵東陵のコンピュータ・グラフィックス復原をめぐる考
察(牟田口章人との共著) 『遼文化・慶陵一帯調査報告
書』 京都大学大学院文学研究科 三月

真下 裕之

ポルトガル関係史料によるインド史研究入門 アジア研究情
報 Gateway (<http://asi.loc.u-tokyo.ac.jp/html/025.html>) 東京大学東洋文化研究所 五月

水野 直樹

一九三〇年代後半朝鮮における思想統制政策——咸鏡南北道
の「思想浄化工作」とそのイデオロギー—— 方基中編
『日帝ファシズム支配政策と民衆生活』ヘアン(朝鮮文)
五月

日朝関係の「過去」と「現在」 日朝友好促進京都婦人会議
編『日本と朝鮮の関係史——古代から現代まで』アジェ
ンダ・プロジェクト 十月

日本の植民地時代をふりかえる 『多民族共生』Vol.46 多
民族共生人権教育センター 二月

『韓国戸籍成冊』に見る朝鮮人の名前 『京都大学朝鮮・韓国
学教育研究ネットワーク報告書・記録集』 三月

宮 紀子

モンゴルが遺した「翻訳」言語——旧本『老乞大』の発見に
よせて——(下) 内陸アジア言語の研究 一九 七月

『龍虎山志』からみたモンゴル命令文の世界——正一教集団
研究序説 東洋史研究 六三巻二号 九月

釈清濬二則 二一世紀COE「一五・一六・一七世紀成立の
絵図・地図と世界観」NEWS LETTER 8 十月

『混一疆理歴代国都之図』への道 拾遺 二一世紀COE

「一五・一六・一七世紀成立の絵図・地図と世界観」
NEWS LETTER 9 十二月

花関孝と楊文広 汲古 四六 十二月

徽州文書新探——『新安忠烈廟神紀美』より—— 東方学報
七七册 三月

宮宅 潔

中国古代法が語るもの 人文 五一号 六月

居延旧簡・居延新簡 地下からの贈り物(9) 東方 二八三
九月

近五〇年日本の秦漢時代法制史研究 周秦漢唐文化研究 三
輯 十一月

司馬遷と『史記』 木田知生・檀上寛編『中国人物列伝』第
三・四講 恒星出版 一月

●古シルクロードの軍事・行政システム——河西回廊を中心
にして(共編著) シルクロード学研究 二二 シルクロー
ド学研究センター 三月

懸泉置とその周辺——敦煌—安西間の歴史地理——シルク
ロード学研究 二二 三月

江陵張家山漢墓出土「二年律令」訳注稿 その(二)(共著)
東方学報 七七册 三月

麥谷 邦夫

華陽隱居への道——若き日の陶弘景と草創期の茅山『坂出

祥仲先生退休記念論集 中国思想における身体・自然・信
仰 東方書店 八月

Filial Piety and 'authentic parents' in religious Daoism.
Alan K.L. Chan and Tan Sor-hoon (eds.) *Filial Piety
in Chinese Thought and History*. Routledge Curzon.

唐代封禪議小考 小南一郎編『中國文明の形成』
朋友書店 三月

村上 衛

一九世紀中葉、華南沿海秩序の再編——イギリス海軍と閩粵
海盜 東洋史研究 六三巻三号 十二月

書評・井上裕正『清代アヘン政策史の研究』 史学雑誌 一
一四編二号 二月

森 時彦

蜘蛛の糸 人文 五一号 六月

Liang Qichao and Western Modernity: An Analysis of His
Translations of the Term "Political Economy" *The Role
of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern
Western Civilization*. University of California, Berkeley.

守岡 知彦

文字素性に基づく文字処理(共著) 情処研報 Vol.2004
七月

文字定義のこと シンポジウム「文字情報処理のフロンティア：過去・現在・未来」予稿集 花園大学国際禅学研究所

Character Processing Based on Character Ontology. 日中共同シンポジウム「漢字文献資料庫の新技術」 中国国家図書館 一月

CHISEで複数の文字同定規準をサポートしてみる 東洋学へのコンピュータ利用第16回研究セミナー 京都大学学術情報メディアセンター 三月

森本 淳生

書評：Paul Valéry / André Fontaines, *Correspondance 1893-1945*. édition établie par Anna Lo Giudice, Editions du Felin, 2002. 仏文研究 第三五号 京都大学フランス語学フランス文学研究会 九月

●未完のヴァレリー（田上竜也と共編訳著） 平凡社 十二月

矢木 毅

高麗時代における土地所有の諸相 史林 八七巻六号 十一月

安岡 孝一

紙テープの呪縛 文字情報処理のフロンティア：過去・現在・未来 六月

顔文字は文字なのか 漢字と文化 三号 六月

テキスト検索は文字列検索でも木検索でもない 第十八回 KIDS 七月

人名用漢字 新字体も認めて混乱を防げ 朝日新聞 七月十四日

入力、出力、そして検索 インターネット時代の人文学の技術 九月

漢字政策と漢字情報処理 インターネット時代の人文学の技術 九月

人名漢字大幅追加 一貫性ないおかしな選定 新字から旧字中心主義に大転換 京都新聞 九月十七日

人名用漢字の文字符号に関する規格検討会報告 標準化ジャーナル Vol.34 No.11 十一月

●人名用漢字の文字符号に関する規格検討会報告 日本規格協会 Text-Searchable Image and Its Applications. 漢字文献資料庫の新技術 一月

日本の地名・人名の字体 東アジアの人名・地名と漢字 二月

「縁」モデルにもとづく拓本文字データベース 第十六回「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナー 三月

山室 信一

戦後日本の中国認識基軸的転移 徐静波・胡令遠編「復旦大学日本研究叢書・戦後日本の主要思潮与中日關係」

上海财经大学出版社 一月

明治維新とアジアの変革 井上勲編『日本の時代史二〇・開国と幕末の動乱』 吉川弘文館 一月

明治儒学的存在形態及其意義 『明治時代の儒学』国際學術研討集 浙江大学日本文化研究所 三月

面向未来的回憶——他者認識和價值創建的視角 中国社会科学研究会編『中国与日本的認識』 中国社会科学出版社 三月

アジアに開く熊本の可能性 中国社会科学文献社 三月

アジヤに開く熊本の可能性 熊本日日新聞 四月一八日

思想連鎖から見た日露戦争 中央公論 六月号 五月

社会変化共有するアジア世界 熊本日日新聞 五月一六日

外国人受け入れを活力に 熊本日日新聞 六月二〇日

文化の基本は「食」の継承から 熊本日日新聞 七月一八日

●増補版・キメラ——満洲国の肖像 中央公論新社 七月

人間ノタツタヒトツノツトメハ 熊本日日新聞 八月一五日

日本にとつてのアジヤ——「満洲国」とアメリカの狭間で 週刊朝日百科・日本の歴史・一一五—現代5アメリカ 八月二二日

自らを高める日中相互認識を 熊本日日新聞 九月一九日

シンポジウム・「いま問われる日露戦争」読売ぶっくれっと 十月

三六号

人生の可能性狭める二分化 熊本日日新聞 十月一七日

東アジア共同体への道 朝日総研レポート 一七四号 十一月一〇日

「くへや世」の怒り、平和への希望

熊本日日新聞 十一月二日

熊本日日新聞 十二月一九日

熊本日日新聞 一月一七日

朝日新聞 二月九日

世界観はぐくむ東アジア共同体に 熊本日日新聞 二月二〇日

家庭と故郷からの日本再生 熊本日日新聞 三月二〇日

横山 俊夫 企画、討論・特集1近江放談会 環境と健康 Vol.17 No.1 〇四年二月

企画、討論・特集2近江放談会 環境と健康 Vol.17 No.2 四月

一三〇〇年へ向けて 平安建都二二〇〇年記念協会ニュース 第五号 五月

共同企画、討論・中国とは何か 第二二回比較会議報告書 日本アイ・ビー・エム株式会社 五月

●科研究果報告書「十九世紀日本における日用百科書による礼法知識伝播についての政治社会学的研究」(改訂版) 京都市立大学地球環境学堂 六月

節用集ならびに大雑書の文明化力 前掲報告書所収 六月

Experiencing a Sustainable Society—Thoughts on the Civilising Role of Satsuyoshu and Ozasho, Two Popular Household Encyclopedias in Premodern Japan

(Oxford Visiting Lecture / 14 November 2003)

前掲報告書所収

六月

●節用の日本文明(『ひととき』連載複製版) 三才学林

●二一世紀の生命科学と社会——近江舞子放談会(共編)

(財)体質研究会(財)慢性疾患・リハビリテーション研究

振興財団 七月

ものあはれを形に/京の文化・技術を総結集 京都プラン

ドフォーラム・パネルディスカッション

京都新聞 九月二四日

紅崩 6号(共同企画、共編、編集後記) 京都大学総務部

広報課 九月

鼎談:二十一世紀の花鳥風月——京都からの提言—— 第二

回 鳥の世界から(長谷川博氏・遠藤彰氏と) 創造する

市民 八一号(財)京都市生涯学習振興財団 十月

対談:私はおけいはんファンです——節用集からおけいはん

まで——(佐藤茂雄氏と) 京阪 五〇三 京阪電気鉄道株

式会社 十月

京都文化会議二〇〇四 地球化時代のこころを求めて(会議

参加者用冊子/共編) 京都文化会議組織委員会 十月

京都ブランド創生の新時代(村田純一氏・芳賀徹氏・上田耕

滋氏と共編) 京都商工会議所会報 六六〇 十一月

世界遺産と時/世界遺産と月/世界遺産と空/世界遺産と水

/世界遺産と道(再録)『煌めきのガラス絵 木田安彦の

世界』松下電工汐留/ニューシム 十一月

●SANSAI, The Journal of the Grove of Universal Learn-

ing. Pre-inaugural Issue 2004 (Tracey Gannon and

Toshio Yokoyama, General Editors) Sansai Gakurin,

Graduate School of Global Environmental Studies,

Kyoto University. 十二月

地球環境学堂「はんなり京都鳴臺塾」を伝統の町家で開催

文教ニュース 一八〇九号 十二月十三日

地方短信・京大 文教速報 六六九一号 一月七日

座談会:「アジアにおける食の安全」(報告:西垣光昭氏、討

論:松林公蔵氏、山極寿一氏、山田勇氏と) 科学

Vol.75, No.1 一月

紅崩 七号(共同企画、共編、編集後記) 京都大学総務部

広報課 三月

京都大学大学院 地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林

年報 平成十五年度(共同執筆) 地球環境学堂 三月

On the Civilising Role of *Ōzashō*, the Household Encyc-

lopedia for Diving in Premodern Japan. *Zinbun* 37 三月

ホメオ京都8(共同企画、討論参加) ホメオ京都事務局 三月

●京都文化会議二〇〇四 報告書(共同企画・共編) 京都文

化会議組織委員会 三月

●Kyoto International Culture Forum 2004 — In Quest of

Kokoro/Human Minds for This Planet, co-planners &

co-eds., Kyoto International Culture Forum Organizing

Committee. 三月

京都大学広報委員会への報告 京都大学広報委員会三月三十

日席上配布資料

三月

本研究所では1997年からホームページを設け、研究所に関するさまざまな情報の提供が行われ、研究所紹介と所員の研究活動紹介をはじめ、図書室・出版物・紀要・講座などの案内が掲載されています。

トップページには本研究所要覧『人文科学研究のフロンティア』がPDFで公開され、また、電子版工具書（道気社・麥谷邦夫）、戦後日本における朝鮮史文獻目録（水野直樹）、ミクロ人類学関連データベース（田中雅一）、WWW Database Chinese Buddhist Text (C.Wittern)、漢字袋（安岡孝一）など研究者にとって有用なコンテンツが提供されています。

さらに附属漢字情報研究センターのページには、東洋学文獻類目検索や全国漢籍データベース、本研究所所蔵石刻拓本資料、西域行記データベース、などの学術データベースもあり、研究支援に努めています。

本誌『人文』も全文を掲載していますので、是非一度ご覧下さい。

URL は以下のとおりです。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>



人文科学研究所紹介

- 沿革
- 組織・機構
- 交通と地図
- 蔵書と資料

所員の研究活動

- 人文科学研究部
 - 個人研究
 - 共同研究
- 東方学研究部
 - 個人研究
 - 共同研究

公開講座・講演会

出版物

- 研究報告書
- 紀要
 - 東方学報
 - 人文学報
 - 欧文記要
- 所報『人文』

図書室

- お知らせ
- 利用案内
- 蔵書
- 教習書

電子アーカイブ

更新履歴

お知らせ

- ◆人文科学研究所助手の募集要項を掲載しました。[7/20]
- ◆「近代京都研究」班担当の夏期公開講座記事を掲載しました。[7/6]
- ◆講演会「舌で読む聖書」の報道記事を掲載しました。[6/28]
- ◆7月30日に人文科学研究所本館大会議室で、「柳田国男生誕130年シンポジウム-京都で読む柳田国男」を開催いたします。[6/26]
- ◆第1回TOKYO漢籍SEMINARの記事（京大広報）を掲載しました。[6/14]

21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」

メディア報道

その他ご紹介

- 17年度来訪研究者
- 海外の東方学研究者による人文科学研究所の教育研究活動についてのレビュー
- 所員のホームページ
- 研究機関・図書館へのリンク
- 所内限定サイト（研究所内でのみ閲覧可能）



人文科学研究のフロンティア
-人文科学研究所要覧
2004年-
[index](Acrobat5以上)

分館
附属漢字情報研究センター



本館